

深川市
国見2遺跡

—北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書—

昭和61・62年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

例言

1. 本書は北海道縦貫自動車道建設用地内のうち、深川市における国見2遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は、財団法人北海道埋蔵文化財センター調査部調査第3課が担当した。
3. 本書は、調査第3課の中田裕香がⅡ-2-(1)・Ⅲ-2を、このほかの部分に熊谷仁志が執筆した。
4. 実測図の縮尺は、原則として次のとおりである。

遺構	1:40	土器拓影	1:3
剥片石器	1:2	礫石器	1:3

各図版にはスケールを示してある。
5. 表中の石材については次の略称を用いた。

And.	:安山岩	Ap.	:アプライト	Gr.	:花崗岩
Sa.	:砂岩	Obs.	:黒曜石	Schi.	:片岩
Silic.	:珪化木	Tu.	:凝灰岩		
6. 調査にあたっては、深川市教育委員会の協力を得た。またつぎの人々の協力・助言をいただいた。
(順不同、敬称略)
当別町教育委員会、野村崇、平川善祥、瀬川拓郎、
卜部信臣、東出隆治



口絵1 遺跡周辺の空中写真(矢印・国見2遺跡)



口絵2 石斧未成品の接合資料

目 次

例言

I 調査の概要

- 1 調査要項…………… 1
- 2 調査体制…………… 1
- 3 調査に至る経緯…………… 3
- 4 遺跡の位置…………… 3
- 5 周辺の遺跡…………… 3
- 6 遺跡の層序…………… 4
- 7 発掘区の設定と調査の方法…………… 5
- 8 調査結果の要旨…………… 6
- 9 遺物の分類…………… 6
 - (1) 土器…………… 6
 - (2) 石器・石製品・その他…………… 6

II 遺構と遺物

- 1 遺構…………… 8
- 2 包含層出土の遺物…………… 10
 - (1) 土器…………… 10
 - (2) 石器…………… 14

III まとめ

- 1 遺跡の時期と性格について…………… 33
- 2 空知地方出土の余市式土器について… 34
- 3 国見2遺跡における石斧の製作過程の復原について…………… 39

写真図版

挿図目次

図Ⅰ-1	遺跡の位置	
図Ⅰ-2	発掘区及び周辺の地形	2
図Ⅰ-3	基本層位模式図	4
図Ⅰ-4	グリッド呼称模式図	4
図Ⅰ-5	重機による遺構確認調査範囲	5
図Ⅰ-6	第Ⅳ層上面の地形と遺構位置図	7
図Ⅱ-1	フレイク集中出土地点分布図	8
図Ⅱ-2	P-1と出土遺物	9
図Ⅱ-3	土器(1)	11
図Ⅱ-4	土器(2)	12
図Ⅱ-5	土器の分布(1)	12
図Ⅱ-6	土器の分布(2)	13
図Ⅱ-7	石器(1)	16
図Ⅱ-8	石器(2)	17
図Ⅱ-9	石器(3)	18
図Ⅱ-10	石器(4)	19
図Ⅱ-11	石器(5)	20
図Ⅱ-12	石器(6)	21
図Ⅱ-13	石器(7)	23
図Ⅱ-14	石器(8)	24
図Ⅱ-15	石器(9)	25
図Ⅱ-16	石器の分布(1)	26
図Ⅱ-17	石器の分布(2)	27
図Ⅱ-18	石器の分布(3)	28
図Ⅱ-19	石器の分布(4)	29
図Ⅲ-1	空知地方出土の余市式土器(1)	37
図Ⅲ-2	空知地方出土の余市式土器(2)	38
図Ⅲ-3	石斧未成品の剥離工程復原図	40
図Ⅲ-4	石斧の製作段階図	41

写真図版目次

口絵 1	遺跡周辺の空中写真	
口絵 2	石斧未成品の接合資料	
図版 1	遺跡の遠景	45
図版 2	発掘調査前の状況	45
図版 3	調査の状況	46
図版 4	調査の状況	46
図版 5	調査の状況	47
図版 6	調査の状況	47
図版 7	発掘調査後の状況(昭和61年度)	48
図版 8	発掘調査後の状況(昭和62年度)	48
図版 9	P-1	49
図版10	P-1 出土の遺物	49
図版11	土器(1)	50
図版12	土器(1)の出土状況	50
図版13	土器(2)	50
図版14	土器(3)	50
図版15	土器(4)	51
図版16	石器(1)	52
図版17	石器(2)	53
図版18	石器(3)	54
図版19	石器(4)	55
図版20	石器(5)	56
図版21	石器(6)	57
図版22	石器(7)	58
図版23	石器(8)	59
図版24	石器(9)	60
図版25	石器(10)	61
図版26	石器(11)	62
図版27	石器・石製品・銃弾(1)	63

表目次

表-1	周辺遺跡一覧表	4
表-2	遺構出土遺物一覧表	30
表-3	包含層出土遺物一覧表	30
表-4	遺構出土掲載遺物一覧表	30
表-5	包含層出土掲載土器一覧表	31
表-6	包含層出土掲載石器一覧表	31



図1-1 遺跡の位置 (この地図は国土地理院発行の2万5千分の1地形図「石狩川」を複製したものである。)

I 調査の概要

1 調査要項

事業名	北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査
事業委託者	日本道路公団札幌建設局
事業受託者	財団法人 北海道埋蔵文化財センター
遺跡名	国見2遺跡（北海道教育委員会登録番号：E-10-30）
所在地	深川市音江町字音江493番地ほか
調査面積	昭和61年度 15,000㎡ 昭和62年度 3,900㎡
調査期間	昭和61年4月1日～昭和62年3月31日 昭和62年4月1日～昭和63年3月31日 (発掘期間：昭和61年8月1日～10月31日、昭和62年7月12日～9月16日)

2 調査体制

昭和61年度		昭和62年度	
理事長	植村 敏 (昭和62年6月25日まで)	理事長	澤 宣彦 (昭和62年6月26日から)
専務理事	山本慎一	専務理事	山本慎一
常務理事	藤本英夫	常務理事	藤本英夫
業務部長	間宮道男		(昭和63年2月3日まで)
調査部長	中村福彦	業務部長	間宮道男
調査第3課長	鬼柳 彰(発掘担当者)	調査部長	中村福彦
文化財保護主事	西田 茂	調査第3課長	鬼柳 彰(発掘担当者)
◇	佐藤和雄	文化財保護主事	熊谷仁志
嘱託	和泉田毅	嘱託	森 秀之
◇	谷島由貴	◇	中田裕香
◇	石川 朗		

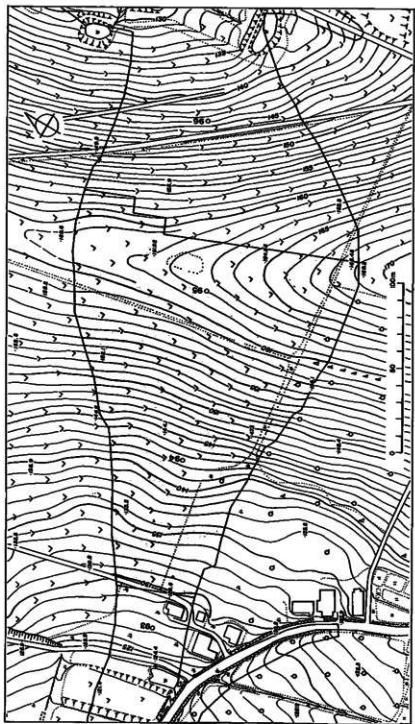


図 I-2 新橋区及び周辺の地形

3 調査に至る経緯

北海道教育委員会は、日本道路公団札幌建設局から北海道縦貫自動車道建設工事に関わる協議を受け、昭和53・54年度、滝川・旭川工事区の埋蔵文化財包蔵地所在確認調査を実施した。国見2遺跡はこの調査によって新たに発見されたものである。北海道埋蔵文化財センターは北海道教育委員会の指示により昭和60年9月、本遺跡の遺物分布範囲や遺跡の性格を知るための事前発掘調査を行った。その結果、工事予定敷地内の広い範囲に遺物が分布していることが判明し、当センターは、昭和61・62年度に発掘調査を実施した。昭和63年度は、調査予定範囲のうち比較的残存状態が良好と思われる部分5,000㎡について調査する予定である。

4 遺跡の位置 (図I-1)

深川市は、石狩川と南電川^{（注）}の沖積平野に発達した町である。古くから旭川方面と留萌方面の分岐点に当たる交通の要地になっている。市街地の南部を石狩川が大きく蛇行しながら流れており、その右岸には沖積平野が広がっている。左岸は、夕張山地から続く幌^{（注）}内山地の北西部の端に当たり、音江山 (796.6m)・沖里河山 (802.1m) から、北に延びる尾根が石狩川までまわっている。

本遺跡は、沖里河山から国見峠に向かって北に延びる尾根上にある。石狩川へは直線距離にして約800mである。遺跡の西側には沖里河山中腹から発する音江川があり、調査区の周辺には数箇所の湧水地点がみられる。昭和63年調査予定範囲の低位部分にも湧水地点があり、水量は豊かで、現在も周辺の農家の生活用水・農業用水として用いられている。

調査区は、尾根の頂上部とこれに続く比較的急な南西斜面で、標高は約130~170mである (石狩川の平均水位は約50m)。道路予定地となる前は、果樹園・牧草地・小豆畑として利用されていた。

「国見」という地名は、明治19年5月に上川仮道が開きくされた際、工事に当たった樺戸監獄の典獄安村治孝と工事監督の看手長吉村彦九郎が、今回調査した国見2遺跡がある尾根の先端部を「国見峠」と名付けたことに由来する。その後、昭和16年6月にこの峠を境に、東側が内^{（注）}大部・音江原野などの一部を総称するものとして音江町字国見、西側の音江法華^{（注）}などが音江町字音江となった。国見2遺跡の所在地は字音江である。

5 周辺の遺跡 (図I-2)

深川市内の遺跡については元音江村教育長池田輝海氏が分布調査を行い、「深川市史」に国指定遺跡の「音江の環状列石」を含む87箇所の遺跡を掲載している。これらの遺跡の時期は縄文時代から推古時代・中世・近世にまで及んでいる。これを見ると石狩川の兩岸の沖積平野には推古時代・中世・近世、周辺の山地には縄文時代の遺跡が点在している。これらの遺跡の中には、明治以来の耕作・工事の際に土器片・石器・兼手刀などの貴重な遺物を出土したものが含まれている。しかし、その後の各種の工事によって失われたものや、その所在が確認されていないものがあり、昭和62年度現在、北海道教育委員会の遺跡台帳に登録されている遺跡数は49箇所である。本項においては北海道教育委員会の遺跡台帳に登録されているもののうち国見

2 遺跡の周辺の遺跡を図示し、一覧表でその概要を記した。

表-1 周辺遺跡一覧表

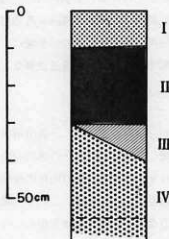
※登録番号は道教委遺跡台帳登録番号

登録番号	遺跡名	種類	時代	登録番号	遺跡名	種類	時代
E-10-1	国見遺跡	墳墓	縄文・中期	E-10-19	東広里遺跡	集落跡	続縄文・縄文
-2	中島遺跡	住居跡	縄文	-30	国見2遺跡	包含地	縄文・早中・後期
-5	音江のチャシ跡	チャシ跡	アイヌ期	-32	一巳水源遺跡	集落跡	縄文
-8	音江の環状列石	配石遺構	縄文・後期	-36	ピラタンネ遺跡	包含地	不明
-10	音江Bの環状列石	○	○	-45	一巳2丁目付近遺跡	集落跡	縄文・縄文
-16	出会沢チャシ跡	チャシ跡	アイヌ期	-48	音江1遺跡	不明	縄文
-18	北広里遺跡	集落跡	不明	-49	音江2遺跡	包含地	縄文・中・後期

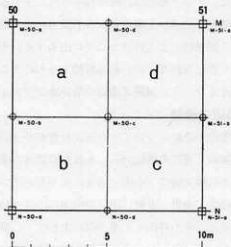
6 遺跡の層序 (図I-3)

基本的な層序は次の通りである。

- I層 黒色土(表土層) 層厚5~10cm。耕作による攪乱をうけている。小角礫が混入している。
- II層 黒褐色土(耕作土層) 層厚15~30cm。耕作による攪乱をうけている。小角礫が混入している。
- III層 暗黄褐色粘質土層(漸移層) 層厚5~10cm。尾根の頂部に部分的に分布している。大小の角礫が混入している。
- IV層 黄褐色粘質土層(地山) 上面が耕作による攪乱をうけている。大小の角礫が混入している。
- I層からIII層にみられる安山岩の礫は、IV層から耕作によって持ち上げられたもので、イル



図I-3 基本層位模式図



図I-4 グリッド呼称模式図

ムケツ山山の噴出物と思われる。遺物はⅠ～Ⅲ層から出土しているが、本来の包含層はⅢ層である。

7 発掘区の設定と調査の方法 (図Ⅰ-4、図Ⅰ-6)

道路予定線センターライン上のSTA 94+00とSTA 95+00を結ぶ直線をMラインとし、それを基準線として北に向かって10m おきにL, K, J, ……南に向かってN, O, P……とした。そして、Mラインに直交する直線を引き、STA 94+00を40ラインとして、10m おきに東に向かって41, 42, 43……の番号を付け、調査区全域に一辺10mのグリッドを設定した。各グリッドは、それぞれ北西隅の交点の記号をもってその呼称とした。発掘調査を進めるにあたっては一辺10mのグリッドを更に4分割し、一辺5mの小グリッドに区画し、北西から反時計回りにa, b, c, dと呼称した。これが発掘区の最小単位となり「M-50-a」のように表示される。昭和61年度の調査は予定範囲全域の遺構出現率、遺物出土状況を把握した後、8,150㎡について重機を用いた遺構確認調査を行った。

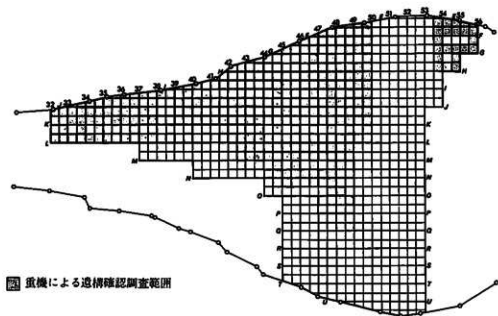
図見2遺跡発掘区の平面直角座標系は以下の通りである。

M-40 (道路予定線センターライン、STA 94+00)

第Ⅱ系 $X = -33876.7776$ $Y = -12957.8525$

M-50 (道路予定線センターライン、STA 95+00)

第Ⅱ系 $X = -33837.3292$ $Y = -12334.9969$



図Ⅰ-5 重機による遺構確認調査範囲

8 調査結果の要旨

調査は、昭和61・62年の2箇年にわたり実施した。標高130mから170mの尾根頂上部分及び南西側斜面である。耕作による擾乱は大部分地山まで及んでいた。遺構は土壌1基が発見されているが、構築の時期は不明である。遺物は土器片・石器・フレイク・石製品・銃弾など計19,880点が出土した。土器の大部分は縄文時代中期後半から後期初頭の北筒式土器・余市式土器であるが、ほかに少量の早期のものと思われる土器がある。石器には石鏃・石槍またはナイフ・石錐(ドリル)・つまみ付きナイフ・スクレイパー・石核・クサビ形石器・石斧・石のみ・丸のみ・すり石・たたき石・くぼみ石・石錘・砥石・石皿がある。礫石器の中では片岩を石材とする石斧・石斧破損品・石斧未成品が多く、これは本遺跡の特徴的な遺物といえる。フレイクには片岩と黒曜石のものが多い。フレイクの集中出土地点が7箇所発見されている。これらの中には石斧の未成品と多くのフレイクとが接合し剝離工程を復原できるものがあつた。

9 遺物の分類(表-2~6)

(1) 土器

土器は、小破片でかつ磨滅の著しいものが多い。このうち時期の判別できるものは、縄文時代中期後半から後期初頭のものである。これらは北筒式土器(トコロ6類・5類)に相当するものと余市式土器に相当するものとに分類される。出土遺物一覧表(表-3)で縄文時代中期・縄文時代後期としたものは、縄文のみが施されたもので、文様・調整・胎土等から、前者はトコロ6類・トコロ5類に後者は余市式土器に類似している。また、不明(薄手)としたものは早期の土器群に含まれる可能性がある。この土器は磨滅が著しく、写真図版のみを掲載するにとどめた。

(2) 石器・石製品・その他

石器は、器種別に分類した。剥片石器には、石鏃・石槍またはナイフ・石錐(ドリル)・つまみ付きナイフ・スクレイパー・クサビ形石器などがあり、礫石器には、石斧・たたき石・すり石・くぼみ石・石錘・砥石・石皿などがある。このほかに石核・Rフレイク(retouched flake)・Uフレイク(utilized flake)・フレイク・礫などがある。出土遺物一覧表で石斧としたものには石斧の未成品・石のみ・丸のみが含まれている。

石製品には垂飾などがある。

その他の遺物として鉄製品・陶器・銃弾・硬貨・貝製のボタンなどがある。いずれも明治中頃以後のものと思われる。

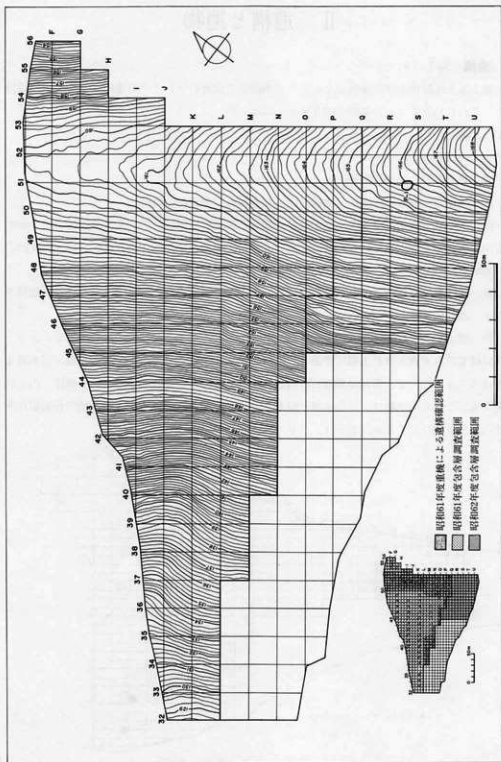


図1-6 第四層上面の地形と遺構位置図

Ⅱ 遺構と遺物

1 遺構 (図Ⅰ-6)

土壕1基を根根頂上部で検出した。また、黒曜石や片岩のフレイクの集中地点を7箇所確認した。これについては、分布図(図Ⅱ-1)に示した。

(1) 土壕

P-1 (図Ⅱ-2)

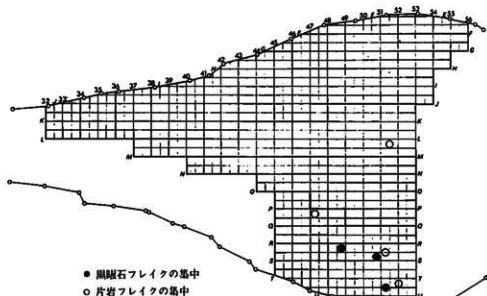
位置 R-50-c・d, R-51-a・b

規模 確認面3.84m×2.90m/竪底3.25m×2.56m/最大深0.25m

層位 1: 暗黄褐色土(基本層序のⅢ層に類似、多量の黒曜石のフレイク及び径1~3cmの安山岩の角礫が混入する) 2: 黄褐色土(少量の黒曜石のフレイク及び径5~10cmの安山岩の角礫が混入する)

特徴 Ⅳ層上面で確認した。平面形は楕円形である。壁は緩やかに立ち上がり、浅い皿状をなす。底面は柔かい。

遺物 覆土1・2層から土器片・スクレイパー・多量の黒曜石のフレイクが出土した。1~3は縄文のみが施された土器片である。文様・胎土・調整からみると北筒式土器と思われる。4はスクレイパーで、素材は黒曜石の縦長剥片である。熱を受けている。出土層位・出土状況から、これらの遺物は、この土壕が廃棄され完全に埋まりきっていない窪地で石器製作を行ったときのフレイクか、または、フレイクを投棄したものと思われる。



図Ⅱ-1 フレイク集中出土地点分布図

2 包含層出土の遺物

(1) 土器 (図Ⅱ-3~6、図版11~15)

土器の大多数は、Oラインよりも南側から出土した(図Ⅱ-5)。磨滅の著しいものが多い。器形や文様によって時期が判断できるものは、縄文時代中期後半から後期初頭に属しており、それ以外のものも、胎土や焼成などからみて、同時期のものがほとんどのようである。ただし、標高163~165mの尾根上から出土した土器の中には、器厚が2ないし3mm程度の薄いものが数点みられた(図Ⅱ-5、図版15)。磨滅のため、文様などは不明だが、胎土も他の土器とは異なり、小礫を含んでいないことからみて縄文早期に属する可能性がある。

1~10、14~16はトコロ6類に相当する。これらは丘陵の頂部付近に分布し、とくにP-1の周辺から多く出土した(図Ⅱ-6)。口縁部に断面三角形の肥厚帯をもつもの(1~5)と肥厚帯が顕著ではないもの(6~9)がある。胎土に小礫を含み、器面に凹凸のあるものが多い。1~3は山形突起をもつものである。1は肥厚帯上やその直下に押引文が施され、口縁部内面にも縄文がある。2は肥厚帯上に爪形文があり、直下の円形刺突文は貫通している。3は地に縄文がみられない。5は口縁部に粘土帯を貼りつけて肥厚帯をつくっている。胎土に繊維を含む。7は押引文、8は半截竹管状工具による刺突文があるもので、器厚は薄い。9の口唇部は調整がなされ、ほぼ平坦になっている。胎土には砂粒を多く含む。10は綾格文が施されている。内面には炭化物が付着している。16は無文の底部で、外側に張り出しをもつ。

13・17はトコロ5類に相当するもので、胴部にはヘラ状工具によると思われる押引文がある。17は直線的に立ち上がる器形で、複筋の斜行縄文が施されている。横倒しの状態で出土した(図版12)。

11・12は、斜め下から突き上げた刺突文があるもので、中期後半の土器と思われる。

18~24は余市式土器に相当するもので、いずれも胎土に小礫を含む。18は口縁部に折り返し帯がある。磨滅のため、縄文の有無は明らかでない。19は口縁に、20・21は胴部に貼付帯をもつ。21の内面は丁寧にみがかれている。

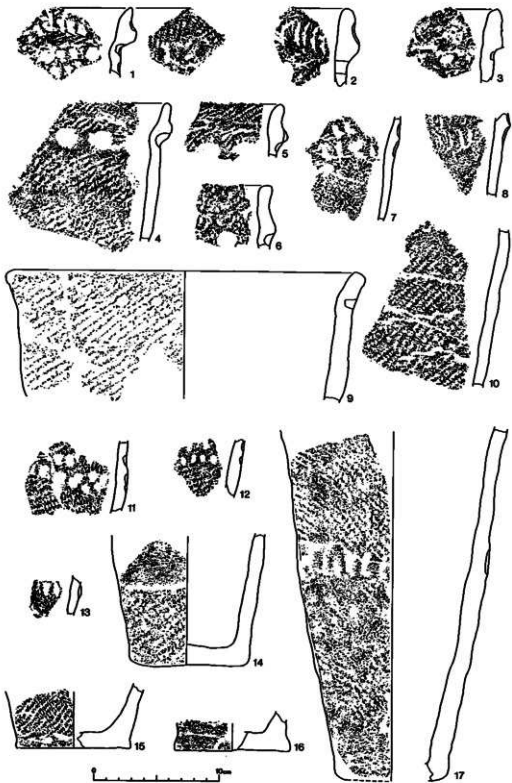
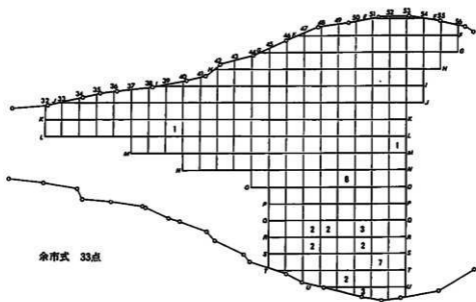
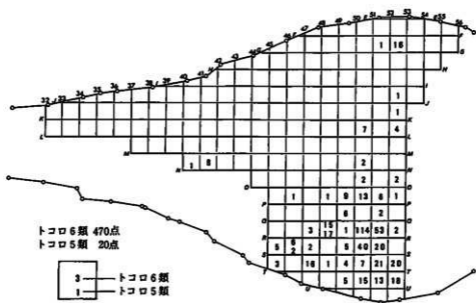


圖 II-3 土器 (1)



図Ⅱ-6 土器の分布(2)

(2) 石器 (図Ⅱ-7~19)

石鏃 (1~23)

1~14は無茎鏃。1~13は凹基である。このうち1~3は細身の三角形石鏃で、形態から縄文時代早期のものと思われる。4~12は三角形石鏃で、形態から縄文時代前期のものと思われる。13は側縁にかすかなえぐりをもつ五角形石鏃である。先端部を欠失している。14の石材は片岩で、磨きによって整形したのち剝離を加えて刃部を作り出している。小型磨製石斧の可能性もある。15~19は有茎凸基、20~22は菱形尖基鏃、23は木葉形の円基鏃である。

石槍またはナイフ (24~47)

24~28は有茎で、先端部がほぼ左右対称である。29~34は菱形である。35~43は有茎で先端部が左右非対称である。44~47は木葉形。27は熱を受けている。46の石材は片岩である。47は未成品と思われる。

石錐(ドリル) (48・49)

48・49は、いずれも剝片の一端に機能部を作り出している。石材は48が黒曜石、49が片岩である。

つまみ付きナイフ (50~56)

50・51は両面加工のものである。52~54は周辺加工によって刃部を作り出し、55・56は片面加工によって刃部を作り出している。

スクレイパー (57~75)

57~68は縦長の剝片を素材にしたものである。57~59・62は両面加工、60・61・63~68は片面加工もしくは周辺加工によって刃部を作り出している。65は棒状の素材を用いている。69~73は横長の剝片を素材としたもので、片面加工もしくは周辺加工によって刃部を作り出している。74・75は両面加工によって刃部を作り出した尖頭部をもつもの(convergent)である。

石核 (76~79)

いずれも石材は黒曜石である。

クサビ形石器 (80)

石槍の破片の可能性もあるが、折断面に数箇所の小さな剝離が加えられているためクサビ形石器とした。石材は黒曜石である。

石斧 (81~99)

石斧・石斧破損品・石斧未成品や石斧の素材と思われる片岩の礫・片岩の剝片が多量に出土している。磨き加えられているものは完成品、加えられていないものは未成品とみられる。81~87は、完成品である。81は素材の形を大きく変えることなく打ち欠き・磨きにより整形したものである。82~87は打ち欠き・磨きによる整形のものである。88~96は未成品である。いずれも粗い打ち欠きによる整形が加えられている。原石面を残すものが多い。88・95は、ほぼ同地点から出土している。95にはベッキングが加えられている。96は剝片との接合関係が認められ、原石の大きさ、剝離の順序を知ることができる(図Ⅲ-3・4)。石材は片岩である。87

の石材は、蛇紋岩である。97は石のみと称されるもので、素材の形を大きく変えることなく磨きが施されている。刃部は欠損している。98は丸のみ形石斧と称されるもので、打ち欠き・磨きが施されている。99は石のみの未成品である。

すり石 (100~105)

すり石として扱ったものの中には、たたき石としての機能や台石としての機能を兼ねる使用痕を合わせ持つものもある。100~104は縄文時代早期の三角柱状の礫の二ないし二稜を擦ったもので、石材は101は安山岩、100・102~105は花崗岩である。105は扁平礫の両側縁を擦ったもので、先端部にたたき痕、両面にくぼみがある。

たたき石 (106~110)

106は円礫を用いたもの。107・108は歪円礫を用いたもので、108の周縁には敲打痕があり、両面にわずかに擦り面がある。109・110は棒状のものである。

くぼみ石 (111~114)

すべて、扁平礫を素材として用いている。

石錘 (115~117)

115・116は、ほぼ短軸にえぐりを持つもので、石材は115は砂岩、116は凝灰岩である。117は長軸にえぐりを持つもので、その形態から縄文時代早期のものと思われる。石材は安山岩である。

砥石 (118~120)

118は扁平で棒状のもの。119・120は縄文時代中期末葉から後期初頭の四面砥石と称されるもので、断面は矩形である。いずれも石材は砂岩である。

石皿 (121~124)

121~123は大型の礫を利用したものである。石材はいずれも砂岩である。121は両面の使用面がくぼんでいる。124は扁平礫の両面を用いている。

台石 (125)

125は稜部分に敲打によると思われる使用痕がある。

石製品 (126~129)

126は扁平な礫で、周縁に溝がある。石材は安山岩である。127は全面が磨きで整形されている。一端にわずかに穿孔の痕跡が認められるが、貫通していない。石材は珪化木である。128は全面が磨きで整形され、両面からの穿孔がある。石材は片岩である。129はいわゆる虫喰石と称されるものである。明瞭な整形痕はない。石材は凝灰岩である。

銃弾 (130~136)

19点出土している。調査区全域から散点的に出土している。明治時代中頃のものと思われる。(1988『音江2遺跡』北海道埋蔵文化財センター 参照)

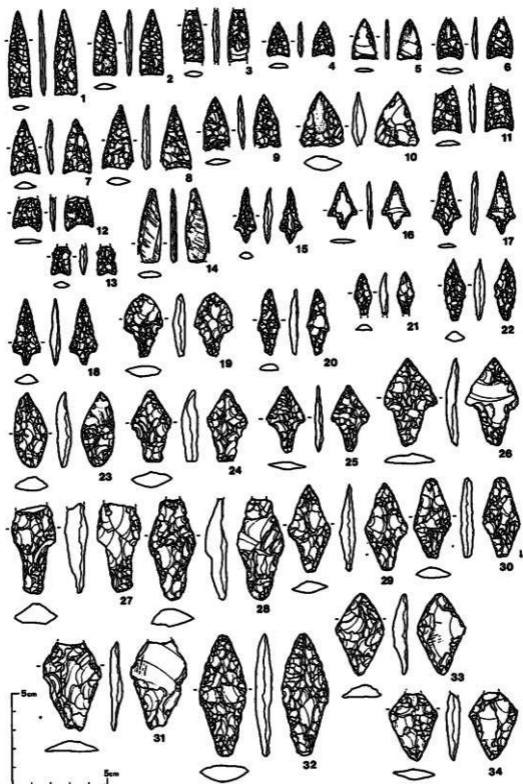


图 II-7 石器 (1)

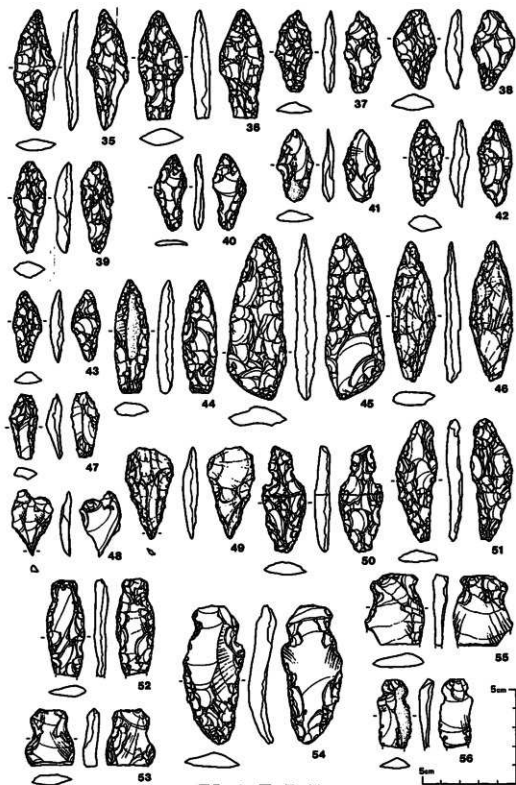
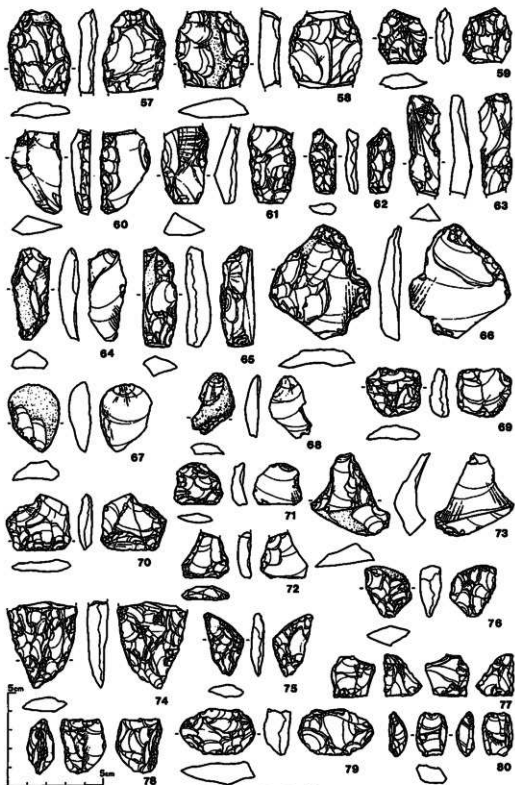
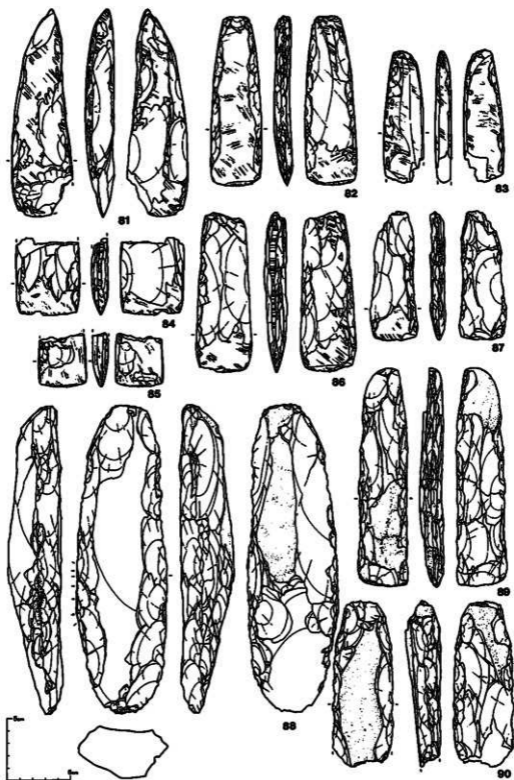


圖 II - 8 石 器 (2)



圖II-9 石器 (3)



图II-10 石器 (4)

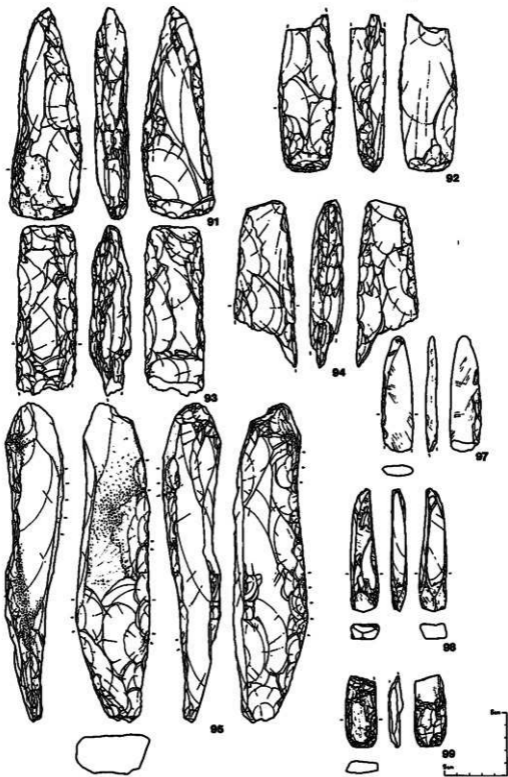


圖 II-11 石器 (5)

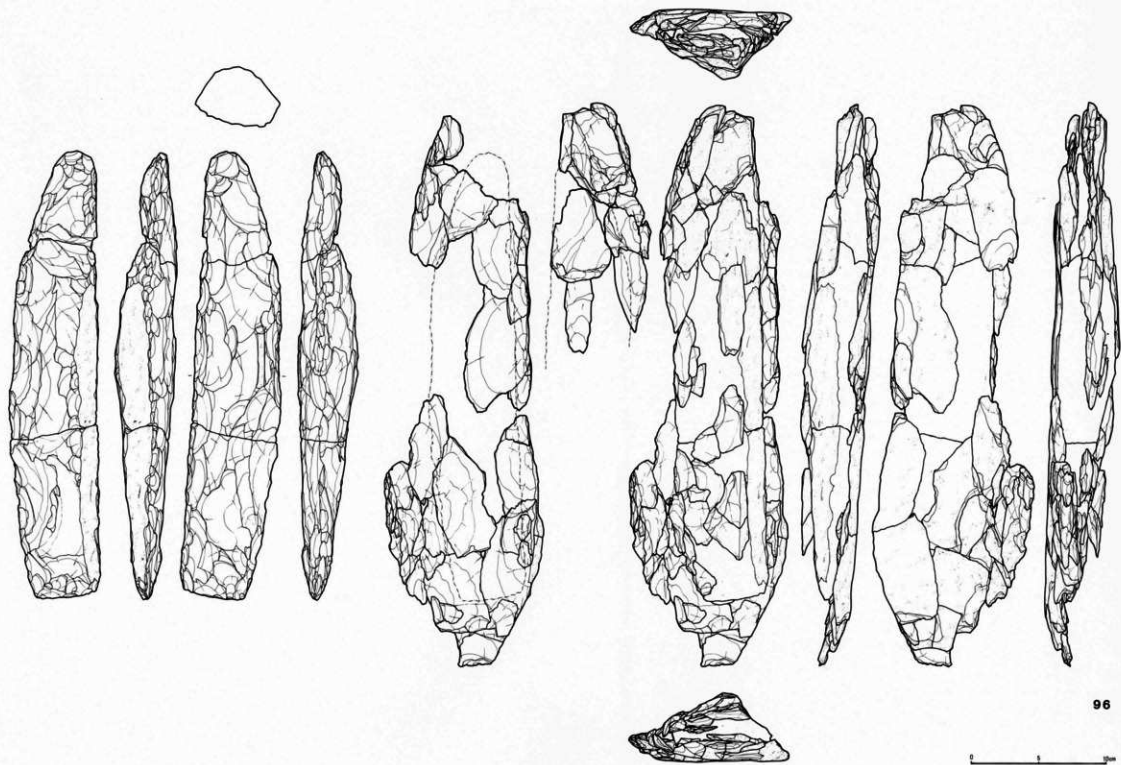


图 II-12 石器 (6)

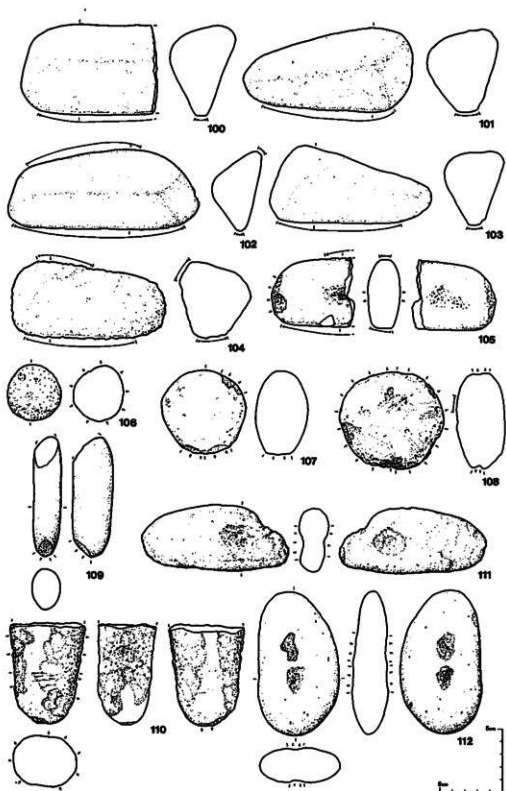
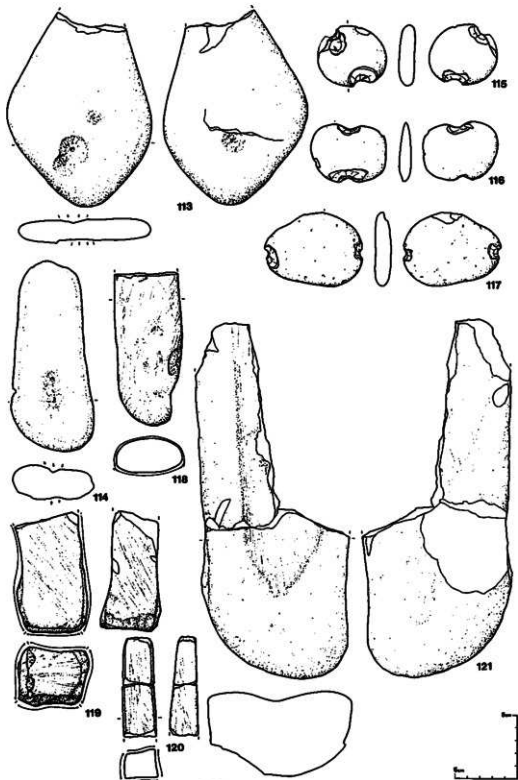


圖 II-13 石器 (7)



圖II-14 石器 (8)

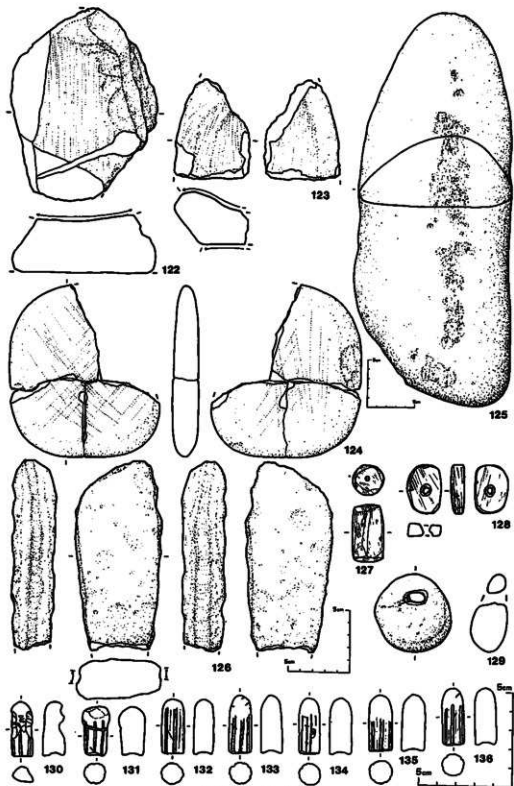
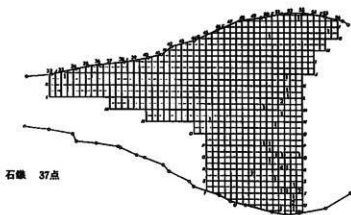
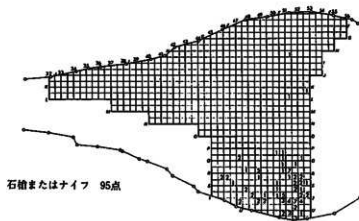
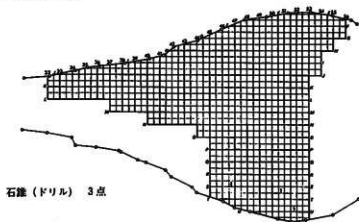


圖 II-15 石器 (9)

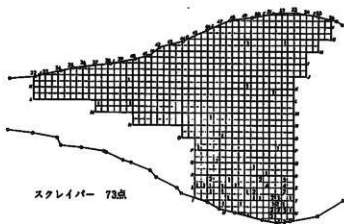


凡例

2 Grid別出土点数



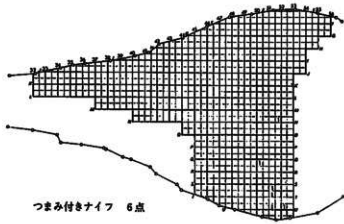
図Ⅱ-16 石器の分布(1)



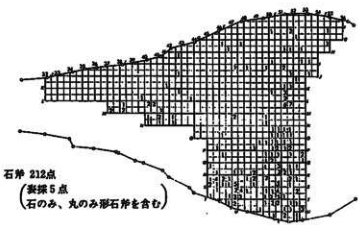
スクレイパー 73点

凡例

2 Grid別出土点数

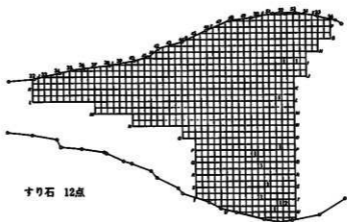


つまみ付きナイフ 6点

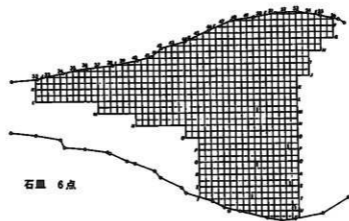
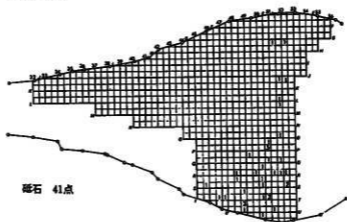


石斧 212点
(表探5点
石のみ、丸のみ形石斧を含む)

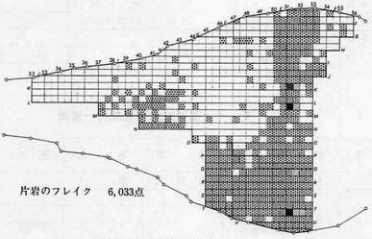
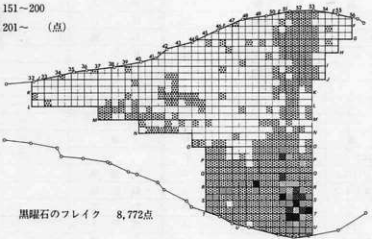
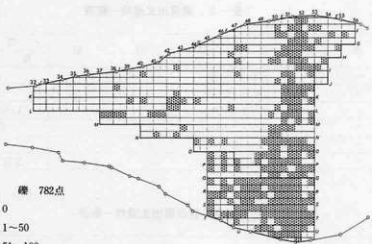
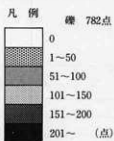
図II-17 石器の分布(2)



2 Grid別出土点数



図Ⅱ-18 石器の分布(3)



図Ⅱ-19 石器の分布(4)

表-2 遺構出土遺物一覧表

遺構名	名称	分類	数量	
			覆土	床面
P-1	土器	北筒式	6	
*	スクレイパー		1	
*	フレイク(Obs.)		1,566	
*	フレイク(Schi.)		37	
*	礫		1	
*	合計		1,611	

表-3 包含層出土遺物一覧表

名称	分類	数量	名称	分類	数量
土器	トコロ6類	470	石皿		6
*	トコロ5類	20	台石		2
*	余市式	33	石錘		3
*	縄文中期	55	Rフレイク		7
*	縄文後期	23	Uフレイク		107
*	不明(得手)	8	Obs.フレイク		8,772
*	不明	1,036	Schi.フレイク		6,033
	計	1,645	フレイク		285
石楯		37	礫		782
石槍またはナイフ		95	計		16,506
石錘(ドリル)		3	石製品		4
つまみ付きナイフ		6	鉄製品		32
スクレイパー		73	陶器		29
石核		19	ガラス		20
クサビ形石器		2	銃弾		19
石斧		212	炭化物		12
たたき石		5	硬貨		1
すり石		12	貝ボタン		1
くぼみ石		7	計		118
礫石		41	総計		18,269

表-4 遺構出土掲載遺物一覧表

番号	遺構	名称	分類	層位	重さ(g)	石材
1	P-1	土器	北筒式	覆土		
2	*	*	*	*		
3	*	*	*	*		
4	*	スクレイパー	*	*	4.2	Obs.

表-5 包含層出土掲載土器一覽表

番号	分類	発掘区	番号	分類	発掘区
1	トコロ6類	Q-50-d	13	トコロ5類	M-40-c
2	+	T-51-a	14	トコロ6類	T-52-a
3	+	R-50-c	15	+	N-52-b
4	+	Q-51-b	16	+	S-47-d
5	+	R-50-c	17	トコロ5類	Q-48-b
6	+	Q-50-b	18	余市式	Q-48-b
7	+	F-52-d	19	+	L-52-d
8	+	R-50-b	20	+	Q-47-c
9	+	Q-50-a	21	+	S-52-c
10	+	Q-50-c	22	+	R-50-c
11	縄文中期後半	R-50-c	23	縄文後期	S-51-c
12	+	Q-49-c	24	+	N-49-d

表-6 包含層出土掲載石器一覽表

番号	分類	発掘区	大きさ(mm)	重さ(g)	石材	番号	分類	発掘区	大きさ(mm)	重さ(g)	石材
1	石 鏃	Q-51-b	4.5 × 1.1 × 0.2	1.3	Obs.	25	石 槍	J-33-a	3.5 × 2.0 × 0.4	1.6	Obs.
2	+	S-52-c	3.4 × 1.2 × 0.3	1.1	Obs.	26	+	S-50-c	4.6 × 2.8 × 0.5	4.3	Obs.
3	+	Q-51-b	(2.7) × 1.1 × 0.3 (0.8)	0.8	Obs.	27	+	U-51-c	(4.7) × 2.3 × 1.1 (8.7)	0.8	Obs.
4	+	S-52-a	1.8 × 1.2 × 0.2	0.4	Obs.	28	+	Q-41-a	(5.3) × 2.4 × 0.9 (8.9)	0.8	Obs.
5	+	J-51-d	2.1 × 1.3 × 0.2	0.4	Obs.	29	+	Q-51-b	4.6 × 2.2 × 0.6	4.6	Obs.
6	+	N-50-d	(2.1) × 1.3 × 0.25 (0.8)	0.8	Obs.	30	+	Q-48-c	4.2 × 1.9 × 0.6	3.9	Obs.
7	+	Q-50-b	2.9 × 2.5 × 0.3	0.9	Obs.	31	+	U-49-	(4.8) × 3.0 × 0.6 (7.5)	0.8	Obs.
8	+	M-45-a	3.4 × (4.6) × 0.35 (1.8)	1.8	Obs.	32	+	P-50-d	6.5 × 2.0 × 0.85	10.7	Obs.
9	+	P-50-c	(2.8) × 1.4 × 0.3 (1.0)	1.0	Obs.	33	+	R-52-a	4.3 × 2.5 × 0.7	5.5	Obs.
10	+	R-48-d	2.9 × 2.3 × 0.7	3.3	Obs.	34	+	R-52-a	(3.6) × 2.6 × 0.4 (4.6)	0.8	Obs.
11	+	M-51-a	(2.4) × 1.5 × 0.3 (1.0)	1.0	Obs.	35	石 槍 ほこり	S-49-b	6.4 × 2.2 × 0.6	6.4	Obs.
12	+	L-51-a	(1.8) × 1.5 × 0.25 (0.7)	0.7	Obs.	36	+	S-49-b	5.7 × 2.3 × 0.6	10.8	Obs.
13	+	F-50-b	3.9 × (1.2) × 0.3 (2.2)	2.2	Schl.	37	+	T-51-d	4.3 × 1.9 × 0.6	4.3	Obs.
14	+	E-52-d	(1.5) × 1.0 × 0.4 (0.5)	0.5	Obs.	38	+	R-51-a	4.2 × 2.3 × 0.7	6.8	Obs.
15	+	P-50-a	2.9 × 1.2 × 0.5	0.7	Obs.	39	+	P-47-b	4.8 × 1.6 × 0.7	5.5	Obs.
16	+	K-51-c	2.5 × 1.5 × 0.2	0.6	Obs.	40	+	P-50-c	4.0 × 1.7 × 0.5	2.4	Obs.
17	+	L-51-a	3.3 × 1.5 × 0.3	1.0	Obs.	41	+	S-50-b	3.8 × 1.9 × 0.6	3.4	Obs.
18	+	F-55-a	3.5 × 1.5 × 0.5	1.4	Obs.	42	+	O-40-	4.6 × 1.8 × 0.8	5.4	Obs.
19	+	Q-51-b	3.3 × 2.0 × 0.6	3.1	Obs.	43	+	Q-50-d	3.8 × 1.6 × 0.6	2.8	Obs.
20	+	Q-51-c	3.4 × 1.2 × 0.4	1.1	Obs.	44	+	R-50-c	3.4 × 1.5 × 0.7	2.7	Obs.
21	+	S-51-b	(2.2) × 0.9 × 0.3 (0.5)	0.5	Obs.	45	+	S-50-a	5.95 × 1.85 × 7.0	8.6	Obs.
22	+	P-52-c	(3.1) × 1.0 × 0.6 (1.4)	1.4	Obs.	46	+	Q-51-d	8.7 × 3.4 × 1.1	25.4	Obs.
23	+	R-50-b	4.9 × 1.8 × 0.7	4.0	Obs.	47	+	R-48-d	7.4 × 2.3 × 0.7	15.0	Schl.
24	石 槍	S-52-a	3.8 × 2.1 × 0.8	4.6	Obs.	48	石 鏃	S-50-d	3.95 × 5.0 × 2.15	2.7	Obs.

番号	分類	発掘区	大きさ(mm)	重さ(g)	石材	番号	分類	発掘区	大きさ(mm)	重さ	石材
49	石 鏝	R-46-c	4.8 × 2.5 × 0.8	7.7	Schi.	93	石片 未成品	T-52-a	(13.5) × (4.6) × 3.2	(281.8)	Schi.
50	つまみ付 ナイフ	T-51-b	5.6 × 2.3 × 0.7	8.0	Obs.	94	*	T-52-c	(13.2) × (5.0) × 2.5	(227.0)	Schi.
51	*	T-52-b	6.4 × 0.7 × 2.05	7.4	Obs.	95	*	R-45-d	25.4 × 5.9 × 3.2	988.8	Schi.
52	*	S-51-b	(5.1) × 0.7 × 1.95	(6.5)	Obs.	96	石 弁	L-51-a ¹⁾ e ²⁾	11.8 × 41.5 × 5.1	1360.0	Schi.
53	*	R-46-b	(3.1) × 2.6 × 0.6	(5.7)	Obs.	97	石のみ	R-45-b	(9.1) × 2.5 × 0.8	(21.5)	Schi.
54	*	Q-50-c	7.3 × 3.2 × 0.9	18.0	Obs.	98	丸のみ	S-47-c	9.7 × 2.2 × 1.2	43.4	Schi.
55	*	M-51-c	(3.1) × 3.8 × 0.8	(9.8)	Obs.	99	未成品	J-71-a	(5.7) × 2.5 × 1.1	(23.7)	Schi.
56	*	S-51-a	(3.6) × 1.7 × 0.7	(3.7)	Obs.	100	すりお (断面三角)	R-50-c	7.3 × (10.8) × 5.2	(596.0)	Gr.
57	スグレ イ バー	S-46-c	(4.3) × 3.3 × 0.7	(11.8)	Obs.	101	*	P-49-d	6.7 × 13.5 × 5.7	628.8	And.
58	*	Q-49-d	(4.1) × 3.8 × 1.1	(20.3)	Obs.	102	*	H-53-b	6.4 × 15.2 × 3.9	449.2	Gr.
59	*	R-47-d	2.9 × 2.6 × 0.7	5.7	Obs.	103	*	S-50-b	6.1 × 12.9 × 4.7	320.8	Gr.
60	*	K-51-a	(4.4) × 2.7 × 1.0	(9.9)	Obs.	104	*	Q-50-a	6.0 × 12.3 × 5.7	566.0	Gr.
61	*	J-39-d	(4.1) × 2.5 × 1.2	(10.7)	Obs.	105	すりお (すり面)	O-51-c	6.6 × (5.5) × 2.6	(143.7)	Gr.
62	*	G-52-a	3.4 × 1.3 × 0.7	3.0	Obs.	106	すり石 (円形)	F-51-b	4.4 × 4.3 × 3.9	87.8	And.
63	*	S-49-a	5.3 × 1.7 × 0.9	7.6	Obs.	107	すり石 (断面三角)	R-51-a	6.6 × 6.7 × 4.2	249.0	Ap.
64	*	R-46-c	4.8 × 2.0 × 1.0	8.9	Obs.	108	*	T-51-d	7.7 × 8.3 × 3.9	336.8	And.
65	*	S-52-a	5.2 × 1.8 × 1.0	12.4	Obs.	109	たたま石 (断面三角)	Q-50-d	9.5 × 2.2 × 3.3	98.0	Sa.
66	*	R-45-b	5.2 × 5.1 × 1.0	27.6	Obs.	110	*	R-52-	(8.1) × 6.0 × 4.1	(272.5)	Sa.
67	*	S-52-c	3.5 × 2.7 × 1.0	9.3	Obs.	111	くぼみ石 (断面三角)	O-50-c	4.7 × 11.7 × 2.4	175.2	Gr.
68	*	S-50-b	3.2 × 2.2 × 0.5	3.2	Obs.	112	*	N-51-c	11.5 × 6.5 × 2.8	283.0	And.
69	*	R-48-b	2.55 × 2.85 × 0.85	5.6	Obs.	113	くぼみ石	R-48-a	15.4 × 11.6 × 1.8	462.0	Sa.
70	*	R-47-b	3.0 × 3.4 × 0.6	6.8	Obs.	114	くぼみ石 (断面三角)	O-41-	15.1 × 6.6 × 2.7	343.7	Sa.
71	*	U-51-c	2.5 × 2.2 × 0.5	3.2	Obs.	115	石 鏝	K-51-d	5.1 × 5.3 × 1.4	49.3	Sa.
72	*	M-46-a	(2.4) × 2.5 × 0.7	(4.0)	Obs.	116	*	J-52-d	4.6 × 6.0 × 1.0	41.8	Tu.
73	*	N-47-b	4.4 × 4.2 × 1.6	11.2	Obs.	117	*	P-50-a	5.9 × 7.8 × 1.3	71.2	And.
74	*	R-52-b	(4.6) × 3.7 × 0.7	(15.8)	Obs.	118	砥 石	R-50-a	(12.1) × 5.4 × 2.7	(251.7)	Sa.
75	*	S-46-a	3.3 × 2.1 × 0.6	3.7	Obs.	119	*	R-42-a	9.6 × 5.6 × 4.8	324.8	Sa.
76	*	S-49-c	2.45 × 2.45 × 1.05	5.7	Obs.	120	*	J-51-d	8.0 × 2.6 × 2.2	62.0	Sa.
77	石 槌	T-50-d	2.2 × 2.3 × 1.5	8.8	Obs.	121	石 皿	R-52-b	(28.3) × (12.1) × 6.8	(200.0)	Sa.
78	*	R-50-d	2.9 × 2.4 × 1.4	8.4	Obs.	122	*	R-52-b	(15.5) × (11.9) × 4.7	(192.0)	Sa.
79	*	T-47-d	4.0 × 2.3 × 0.8	11.4	Obs.	123	*	Q-49-b	(8.0) × (6.0) × 4.2	(219.0)	Sa.
80	タケノ 石 磨	Q-51-b	2.3 × 1.6 × 0.9	3.6	Obs.	124	三 二 一	(13.8) × 12.1 × 2.1	(376.9)	Sa.	
81	石 弁	Q-41-a	16.4 × (4.9) × 2.0	(253.8)	Schi.	125	台 石	R-50-	41.6 × 16.8 × 7.4	7400.0	And.
82	*	Q-50-c	13.4 × 4.1 × 1.3	131.5	Schi.	126	石製品	J-50-c	(10.1) × 4.7 × 2.3	(153.9)	And.
83	*	Q-51-b	(10.5) × (3.2) × 1.25	(72.3)	Schi.	127	*	O-48-d	3.0 × 1.6 × 1.6	13.7	Stlic.
84	*	P-40-a	(6.1) × 5.0 × 1.2	(65.6)	Schi.	128	*	Q-48-b	2.6 × 1.8 × 0.7	6.3	Schi.
85	*	H-50-	(4.2) × 3.8 × 1.2	(28.4)	Schi.	129	*	H-52-c	4.2 × 4.1 × 1.9	33.4	Tu.
86	*	Q-50-c	12.7 × 4.4 × 1.4	153.4	Schi.	130	銃 弾	G-57-a	2.9 × 1.1 × 0.9	23.8	鉛
87	*	S-47-d	10.2 × 3.8 × 1.1	65.0	Schi.	131	*	G-50-c	2.7 × 1.5 × 1.1	28.8	*
88	石片 未成品	R-45-d	24.5 × 7.3 × 4.2	1011.0	?	132	*	F-55-a	2.9 × 1.2 × 1.1	29.0	*
89	*	L-51-d	17.3 × 4.1 × 1.7	172.7	Schi.	133	*	K-50-d	3.1 × 1.2 × 1.1	30.2	*
90	*	T-52-c	(13.3) × 4.8 × 2.0	(261.1)	Schi.	134	*	N-49-d	3.0 × 1.1 × 1.2	29.8	*
91	*	R-45-b	16.8 × 5.7 × 2.6	369.8	Schi.	135	*	L-52-c	3.0 × 1.2 × 1.2	29.6	*
92	*	S-50-c	(12.4) × 4.6 × 2.4	(224.8)	Schi.	136	*	P-50-b	3.0 × 1.2 × 1.2	29.7	*

Ⅲ まとめ

2箇年の調査によって土壌1基、フリイクの集中出土地点7箇所が検出された。出土した遺物は縄文時代の土器片・石器・フリイク・礫や明治中頃以降のものと思われる銃弾・陶器・鉄器など計約20,000点である。調査は、昭和63年度も継続される予定になっているが、これまでの調査の成果から本遺跡の性格及び遺物について検討し、まとめとする。

1 遺跡の時期と性格について

本遺跡から出土した土器は、縄文時代早期のものと同期後半から後期初頭と思われるものである。石器は時期を知ることが困難なものが多いが、中には早期の細身の三角形石鏃・断面三角形のすり石、前期の三角形石鏃、中期後半から後期初頭の有茎石鏃・石槍またはナイフ・断面矩形の砥石など、その特徴的な形態から時期が想定されるものもある。土器と石器の属すると思われる時期を総合して考えると、国見2遺跡は縄文時代早期・前期・中期・後期に関わる遺跡と思われる。そして、その主体となる時期は、出土した遺物のうち多くを占める縄文時代中期後半から後期初頭と推定される。

今回の調査では検出された土壌がわずかに1基と少なく、また、包含層のほとんどが耕作による擾乱を受けていたことから遺跡の性格を詳しく捉えることが困難ではあるが、遺物の出土状況・遺物内容から本遺跡の性格を知るための特徴を挙げると次のようになる。

- (1) 黒曜石や片岩のフリイクが遺物総数に占める割合が多い。
- (2) 黒曜石や片岩のフリイクが集中して出土した地点が7箇所認められた。
- (3) 集中して出土した片岩のフリイクの中には石斧未成品と剝片とが接合し、素材の大きさ、剝離過程の判る接合資料がある。
- (4) 片岩を素材として用いた石斧・石斧未成品が多量に出土している。
- (5) 石斧の未成品の中には、製作工程の各段階のものが認められる。
- (6) 石斧の素材として用いられる片岩の自然礫が出土している。
- (7) 石器製作に用いられたと思われる、たき石・砥石・台石等の石器が出土している。

これらの特徴から国見2遺跡の性格のひとつとして石器の製作が行われた場所であることが想定される。とくに石斧・石斧未成品や、これらと同じ石材のフリイクが多量に出土していることから「石斧製作の場」としての性格が考えられる。耕作によって削平された可能性もあるが、18,900㎡にも及ぶ調査で住居跡が検出されなかったことは、「生活の場」と言うよりはむしろ「石器製作の場」としての性格が強かったものと思われる。したがって、これらの遺物を残した人々の集落を営んだ場所は未調査区あるいは本遺跡の周辺に想定される。

本遺跡と同様に石器が製作されたと考えられている遺跡には、旭川市の嵐山2遺跡、深川市の向陽2遺跡などがある。これらの遺跡は遺構が少なく、多量の片岩・黒曜石のフリイクを出土していること。数箇所の片岩フリイクの集中地点が認められたこと。また、石斧には片岩を

石材とするものが多いこと。遺跡が石狩川に近い丘陵上にあることなどが共通している。これらの片岩は、神居古潭変成岩地帯にあり、石狩川の河原石にも多くみられる。

2 空知地方出土の余市式土器について

余市式土器は、道央から道南にかけて分布しているが、その北限は、桑原護氏の論文に示された地図によれば、第一期（伊達山期）には浜益郡浜益村、第二期（静狩上層・入江三類の時期）には空知郡奈井江町付近にあるとされている（桑原 1968）。また、石狩郡当別町伊達山遺跡第Ⅰ地点の報告書には、桑原氏の図に一部加筆したものが掲載されており、「より古いグループ」（円形刺突文をもつもの）は深川市付近、「より新しいグループ」（円形刺突文をもたないもの）は小樽市付近が北限で（註1）、「宗谷とエリモを結ぶ山地の東側へまでは至っていない」とある（岩崎・三重・壺田 1970）。

最近、開発に伴う緊急調査が増加する中で、空知地方における余市式土器の資料も多くなってきたが、概内山地よりも北東から出土した例は報告されておらず、現在までのところ、分布の北限は、国見2遺跡が位置する深川市にあるようである。

ここでは、空知地方から出土した余市式土器の分類を行い、地域的な特徴をとらえてみたいと思う。ただし、細分されたものの間の新旧関係は、資料の不足のために明確ではない。

空知地方出土の余市式土器は、遺構に伴った例に乏しく（註2）、多くは断片的な資料である。文様などから、次のように分類することができる（図Ⅲ-1・2）。

1類 口縁部に円形刺突文が施されたもの（1～6）

砂川市西豊沼A遺跡（1、野村編 1977・北海道埋蔵文化財センター編 1987b）、空知郡栗沢町由良A遺跡（2、富水 1987）、深川市向陽2遺跡（3、北海道埋蔵文化財センター編 1987c）、夕張郡栗山町鳩山第Ⅰ遺跡（4・5、栗山町社会科サークル編 1964）、空知郡奈井江町茶志内4遺跡（6、北海道埋蔵文化財センター編 1986b）から出土している。1はほぼ直立する器形で、口縁部の粘土帯上には押引文がめぐっている（註2）。2の円形刺突文は、斜め下から突かれたものである。1・2の口唇部には縄文が施されている。3は粘土帯を張り付けた後に刺突がなされているようである。4・5は二段にわたって口縁部が折り返されたもので、4は幅の広い折り返し帯の直下にも円形刺突文がある。

2類 円形刺突文をもたないもの（7～9、12～17）

a 幅の広い折り返し帯をもつもの（7～9）

砂川市空知太2遺跡（7・9、北海道埋蔵文化財センター編 1987b）、同市空知太遺跡（8、野村編 1977・北海道埋蔵文化財センター編 1987b）などから出土している。7・9は口縁部が二段にわたって折り返されている。7は上部の細い折り返し帯上に半截竹管状工具による押引文がある。8は直線的に立ち上がる器形である。

b 幅の狭い折り返し帯あるいは貼付帯をもつもの（12～17）

深川市国見2遺跡（12・13）、空知郡奈井江町宮村2遺跡（14・17、北海道埋蔵文化財センター編 1986b）、空知太2遺跡（15・16、北海道埋蔵文化財センター編 1987b）など

から出土している。15～17は2つの異なる原体による羽状縄文が施されている。17は斜めに下がる貼付帯が一部にみられる。

3類 縄線文の施されたもの (18～20)

空知太2遺跡 (18・19、阿北海道埋蔵文化財センター編 1987b)、由良A遺跡 (20、富水 1987) から出土している。18・19の縄線文は折り返し帯の上に施されている。20は粗い斜行縄文を地文として、口縁に平行な2本の縄線文が押捺され、更に縦方向に2本の縄線文が加えられたものである。

4類 縄文のみのもの (21～24)

由良A遺跡 (21～23、富水 1987)・国見2遺跡 (24) などから出土している。21～23は粗い縄文が施されたもので、23には、繊維の混入がみとめられるという。

1類・2類aに類似したものは、江別市大麻1遺跡 (阿北海道埋蔵文化財センター編 1980・1981)・同市西野幌3遺跡 (阿北海道埋蔵文化財センター編 1980・1987a)、石狩郡当別町伊達山遺跡第I地点 (岩崎・三室・室田 1970)、浜益郡浜益村浜益中学校遺跡 (大場・石川 1961) などであり、従来、伊達山式 (高橋 1981) とされてきたものにほぼ相当すると思われる。ただし、空知地方のものには、大麻1遺跡や伊達山遺跡第I地点の資料にみられるような、口縁部に無文帯をもつ例はないようである。また、伊達山遺跡第I地点で出土しているような「後期的な沈線文のある土器」 (大沼 1981) も報告されていない。

2類bは従来、1類・2類aに伴うとみなされてきたが、後者とは地の縄文にもわずかに違いがあり、将来、細分される可能性もあるといえよう。

3類のうち、18・19に類似したものは虻田郡虻田町高砂貝塚 (大島・百々編 1987) など噴火湾沿岸に分布し、大麻1遺跡 (阿北海道埋蔵文化財センター編 1981) からみずかに出土している。また、20に類似したものは、苫小牧市タブコブ遺跡 (佐藤・宮夫編 1984)、登別市川上B遺跡 (阿北海道埋蔵文化財センター編 1986a) など胆振・日高地方を中心に報告されている。タブコブ遺跡では、これらに「貼付帯の有無にかかわらず縄端を円形刺突文風に押圧したグループ」や縄文のみのグループが伴っており、宮夫婦氏によって「タブコブ式」が設定されている。「タブコブ式」は伊達山式に対比されるという (佐藤・宮夫編 1984) (註4)。

4類のうち、21～23は20に伴うものと思われる。

以上、空知地方の余市式土器について簡単に述べてきたが、余市式の前後、この地方には、どのような土器が存在したのだろうか。

空知地方では、トコロ6類に相当するものが各地にみられるが、トコロ5類に相当するものは、国見2遺跡からみずかに出土している程度であり、それらに後続するものは報告されていない。

一方、夕張郡由仁町東三川遺跡からは船舶上層式 (山代・野村 1969)、夕張郡長沼町ウレロッチ川左岸遺跡 (野村編 1977) や深川市音江の環状列石 (駒井 1959) からは、手箱式土

器が出土しているが、余市式土器との間には若干の断絶があるといえる。

当地方における余市式土器の細分・終末の問題は、トコロ5類以降の分布の縮小や、入江式土器の北上(註5)ともからめて今後の課題であろう。

註1 余市式土器の新しいものに関して認められる差異は、円形刺突文をもたない土器がどのような土器と共存するのかについての両者の考え方のちがいを反映しているものと思われる。

2 砂川市空知太2遺跡では、H-2の床面から9・10が「北筒式土器」の破片一点とともに検出されている(跡北海道埋蔵文化財センター編 1987b)。また、深川市向陽遺跡でも住居跡から出土したとされる(深川市 1977)。

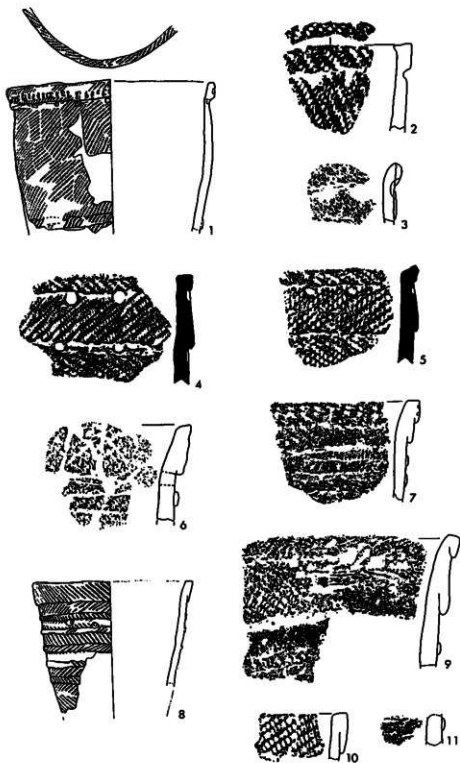
3 空知太2遺跡の報告者は、「北筒式土器と余市式土器の特徴をかねそなえ」たものと述べている(跡北海道埋蔵文化財センター編 1987b)。

4 大沼氏は「タブコブ式」を余市式の新しい段階のものと考えている(大沼 1981)。

5 入江式土器は、江別市大麻1遺跡(跡北海道埋蔵文化財センター編 1981)などから出土している。

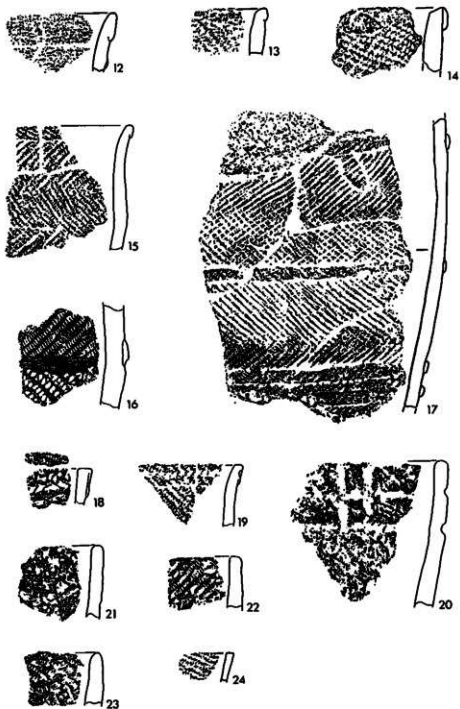
引用文献

- 岩崎隆人・三室俊昭・室田彰剛 1970 『伊達山遺跡』、当別町教育委員会
大島直行・百々幸雄編 1987 『高砂貝塚』、札幌医科大学解剖学第2講座
大沼忠春 1981 「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」(『考古学雑誌』第66巻第4号、日本考古学会)
大場利夫・石川徹 1961 『浜益遺跡』、浜益村役場・浜益村教育委員会・浜益村文化財調査委員会
栗山町社会科サークル編 1964 『栗山町の文化財』、栗山町教育委員会
森原 康 1968 『余市式土器』(『考古学雑誌』第54巻第1号、日本考古学会)
駒井和愛 1959 『宥江』、慶友社
佐藤一夫・宮夫靖夫編 1964 『タブコブ』、苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財センター
高橋正勝 1981 『北海道南部の土器』(加藤晋平・小林達雄・藤本強編『縄文文化の研究』第4巻 縄文土器Ⅱ、雄山閣出版)
高木慶一 1987 『栗沢町由良A遺跡出土の遺物』(『北海道考古学』第23輯、北海道考古学会)
野村崇編 1977 『石狩川中流域の先史遺跡』(『空知文化財シリーズ』第6集、空知地方史研究協議会)
深川市 1977 『深川市史』
跡北海道埋蔵文化財センター編
1980 『大麻1遺跡・西野幌1遺跡・西野幌3遺跡・東野幌1遺跡』
1981 『大麻1遺跡』
1986a 『登別市 川上B遺跡 C地区』
1986b 『砂川市 焼山2遺跡 奈井江町 宮村2遺跡・茶志内4遺跡』
1987a 『江別市 西野幌3遺跡』
1987b 『砂川市 空知太2遺跡』
1987c 『深川市 向陽2遺跡』
山代照・野村崇編 1967 『北海道由仁町の先史遺跡』、由仁町教育委員会



図三-1 空知地方出土の余市式土器(1)

- 1 西豊宿A遺跡 2 由良A遺跡 3 向陽2遺跡 4・5 鳩山第Ⅰ遺跡
6 茶志内4遺跡 7・9～11 空知太2遺跡 8 空知太遺跡



図III-2 空知地方出土の余市式土器(2)

12・13・24 国見2遺跡 14 17 富村2遺跡 15・16・18・19 空知太2遺跡
20-23 由良A遺跡

2 国見2遺跡における石斧の製作過程の復原について

本文中で述べたように本遺跡出土の遺物のうち、特徴的なものとして、石斧と石斧の未成品や石斧の原石と思われる礫がある。これらは加工の状態で大まかに4種に分けられる。これは石斧の製作段階に対応するものと考えられる。

第1段階 (図版20)

石斧の原石と思われる自然礫や、その周辺にわずかに剥離がくわえられているものがある。15~20cm前後の一端が尖った寛状で扁平のものが出土している。出土量は少ない。

第2段階 (図Ⅱ-10・11-88~96・99 図版19)

荒削整形の段階。ほぼ全面に粗い剥離による整形が施されたもので、形態や整形のための剥離の施し方にバリエーションが認められる。大きさは30cm前後のものと20cm前後のものがある。形態には、断面が楕円形のもの、薄く扁平なものがある。剥離の施し方には、素材の形を大きく変えることなく刃部だけを作成しているもの、部分的に剥離が施され原石面を残したもの、全面に施されているものがある (図Ⅲ-4)。

図Ⅱ-12-96は素材の大きさと剥離過程がよく判る資料である。素材には一端の尖った礫を用いている。側面の中央から最初の剥離を加え、両端に向かって粗く大きい剥離を施している。同じ方法で、ほぼ全面の原石面を取り除いた後、更に小さな剥離を側面から加え、一端のやや尖った反り身の短冊状のものを作出している。断面は楕円形である (図Ⅲ-3)。この未成品は3つに折れて、多量のフレイクと共にまとまって出土した。この出土状況からみると整形剥離の途中に折れ、その場に捨てられたものと思われる。出土した破損品のほとんどは、この段階のものである。第2段階では多量の破損が出たと思われる。

第3段階 (図版21の上段)

調整のためのベッキングが施されたもので、断面が厚く亜円形のものが多い。破損品のみで全体の形態が判るものはない。出土量は少ない。

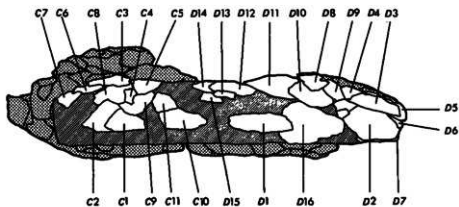
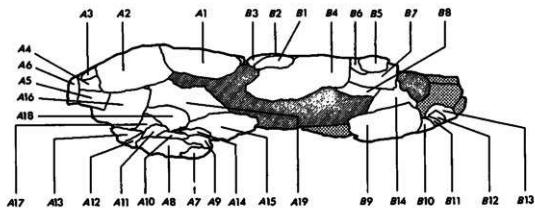
第4段階 (図Ⅱ-10-81~87 図版18・21の中段と下段)

磨きが全面ないし刃部に施されたもの。完成品あるいはそれに近いものと思われる。大きさは12cm前後のものが多く、形態は短冊状で薄いものがほとんどである。出土した完成品は、未成品に比べて少ないように思われる。

以上、各段階の特徴を述べた。第1段階の資料をみる限りでは、原石の採取に当たっては一端が尖った寛状の扁平のものを選択する傾向がある。第2・第3段階にみられた大形の未成品を作出できるような大きな原石は出土していない。本遺跡の包含層・地山に石斧の素材として多く用いられた片岩の礫が含まれないことを考えると、原石は他の場所から持ち込まれたものと思われる。

前述したとおり、本遺跡は石狩川に近く、その河原には上流の神居古潭変成岩地帯からもたらされた片岩の河原石が多い。このことから石狩川の河原が石斧の原石の採取地として考えることが出来る。

第2・第3段階はベッキングがあるフレイクが認められることから繰り返行われたと思われる。第4段階の完成品には、第3段階のベッキングを施さず磨きを加えられているものもある。ほとんどは小型で薄い短冊状のものである。第2・第3段階の未成品に見られた大形のものや断面の両端が尖る楕円形のもの・亜円のものに似た形態の完成品はない。



凡例

□ 剥離されたフレイク

■ 裏面のフレイク

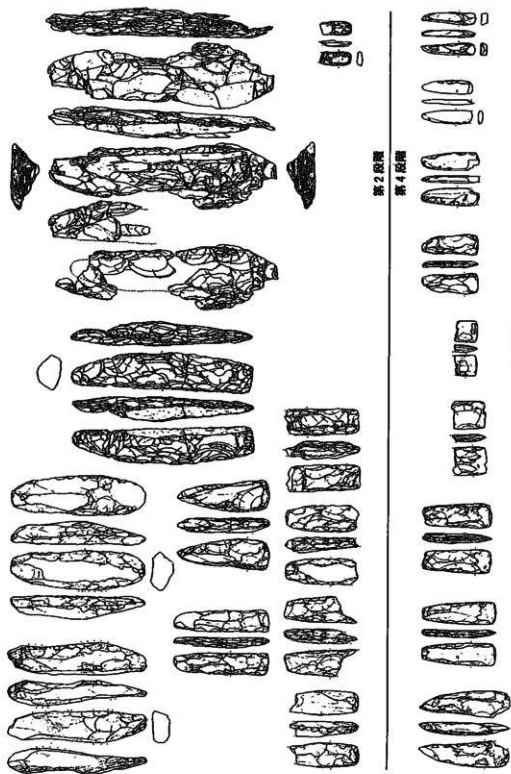
■ 石斧未成品の本体

A~Dは、一連の剥離工程群

C? → 一連の剥離工程群

↳ 数字は剥離の順序

図Ⅲ-3 石斧未成品の剥離工程復原図



図三—4 石斧の製作段階図

写 真 图 版



図版1 遺跡の遠景



図版2 発掘調査前の状況



図版3 調査の状況



図版4 調査の状況



図版5 調査の状況



図版6 調査の状況



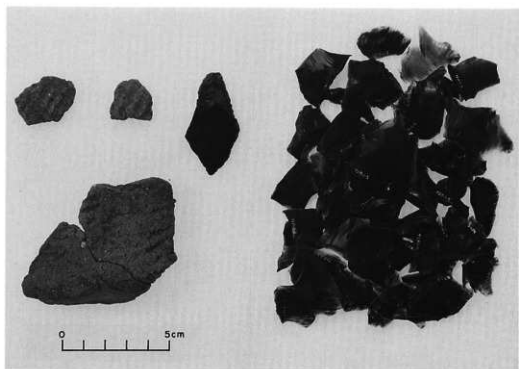
図版 7 発掘調査後の状況（昭和61年度）



図版 8 発掘調査後の状況（昭和62年度）



図版9 P-1



図版10 P-1 出土の遺物



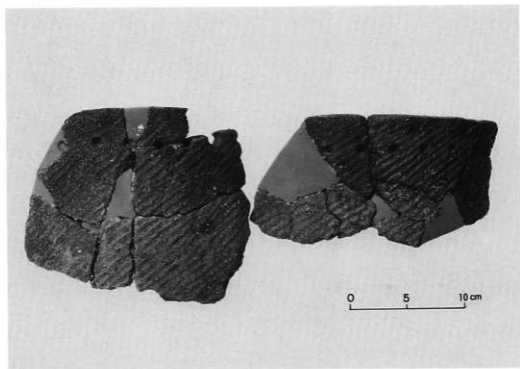
図版11 土器 (1)



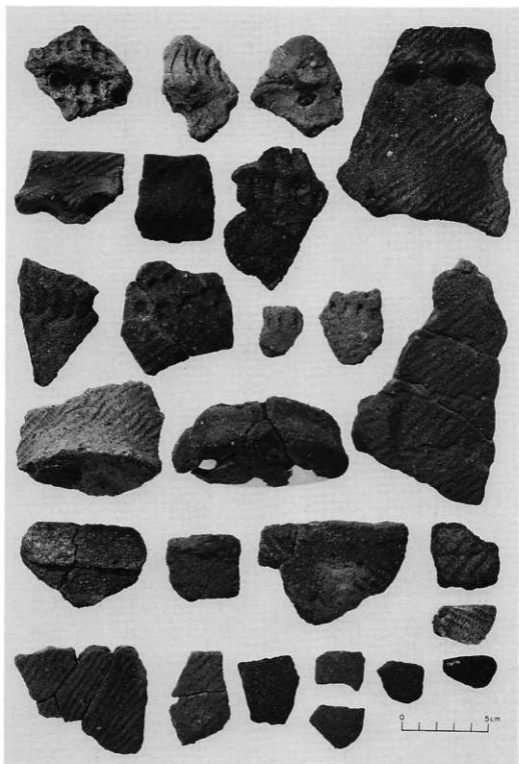
図版12 土器(1)の出土状況



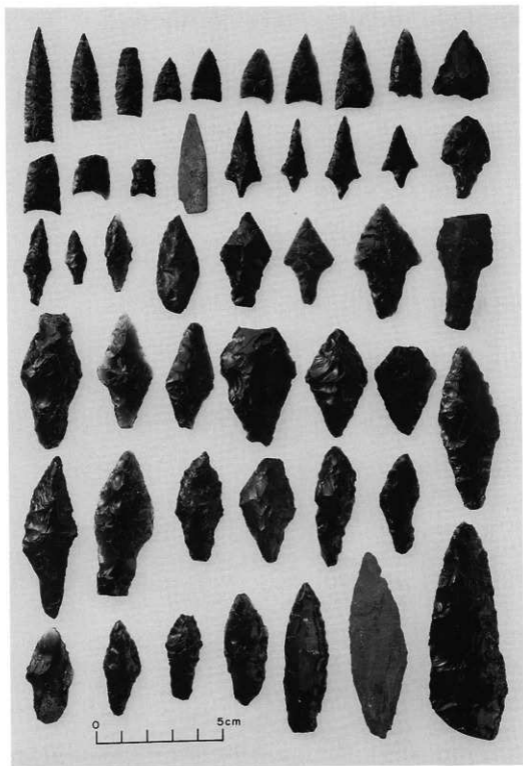
図版13 土器 (2)



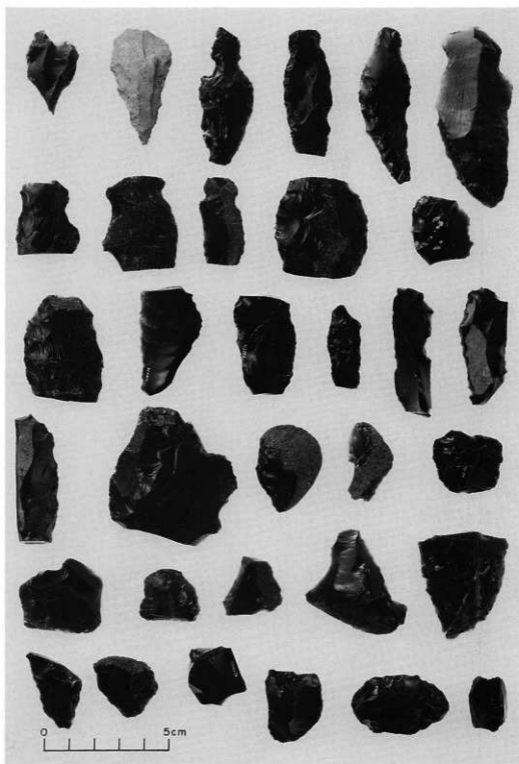
図版14 土器 (3)



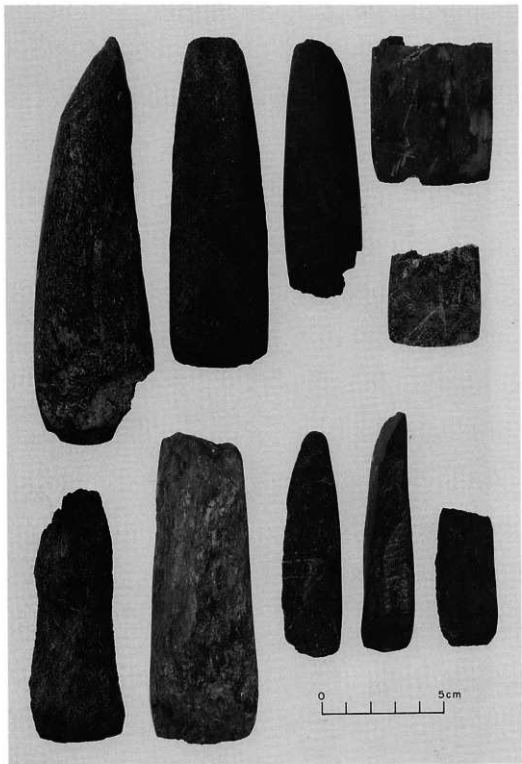
图版15 土器 (4)



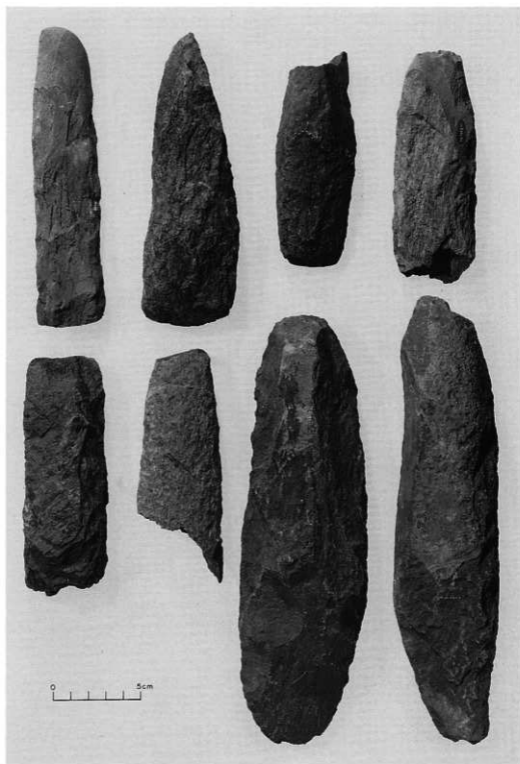
图版16 石器 (1)



图版17 石器(2)



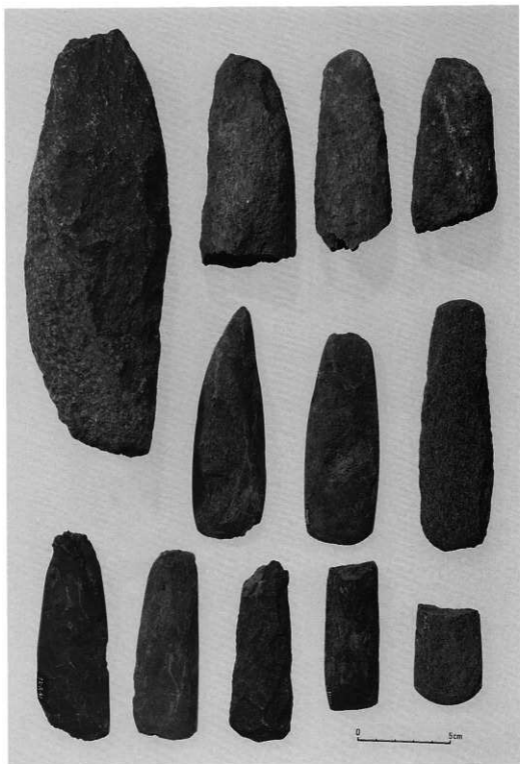
图版18 石器 (3)



图版19 石器(4)



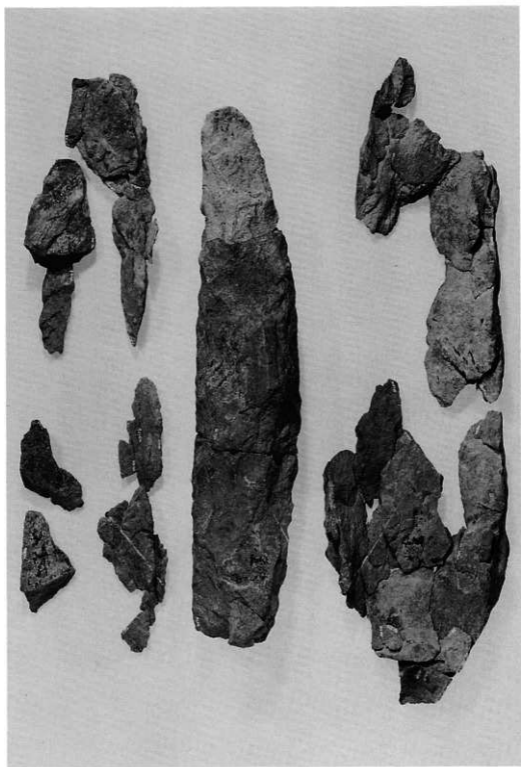
図版20 石器(石斧の原材と思われる礫：第1段階) (5)



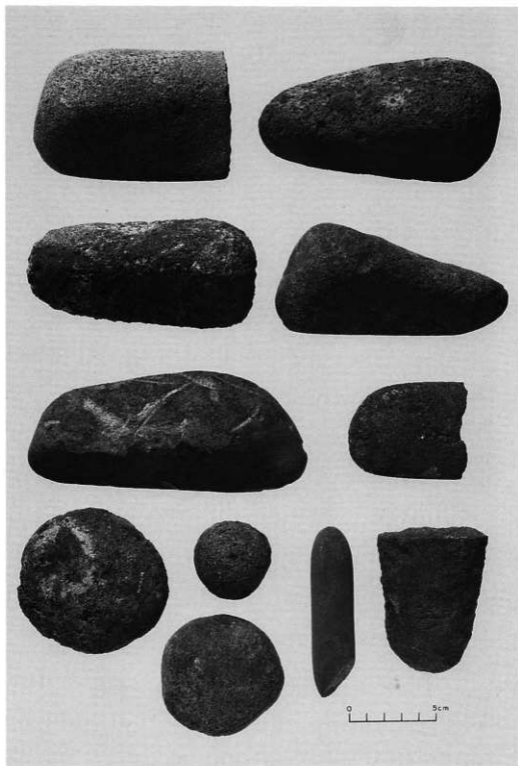
図版21 石器 (上段は第3段階、中・下段は第4段階) (6)



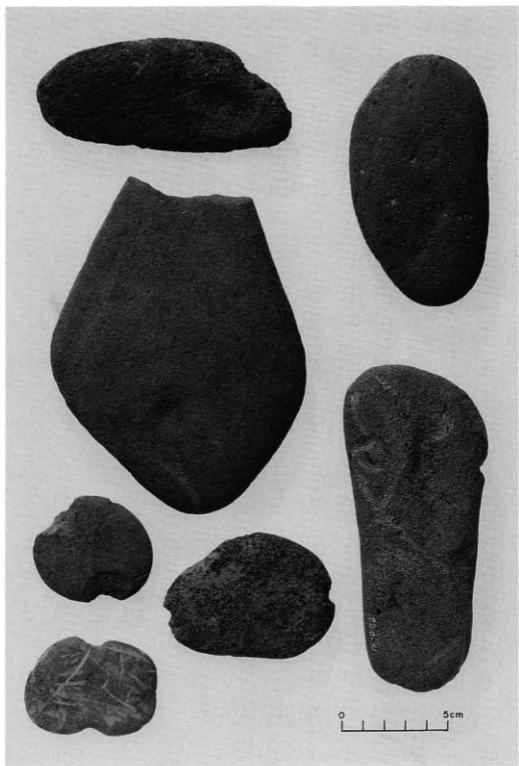
图版22 石器 (7)



圖版23 石器(8)



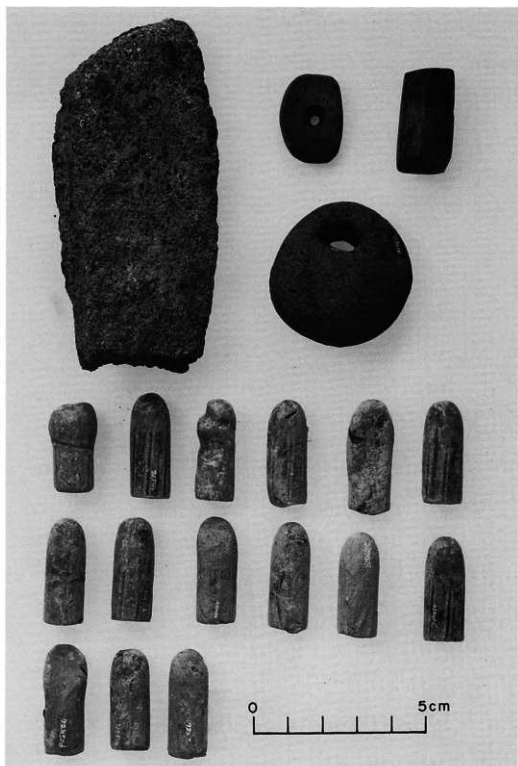
图版24 石器 (9)



圖版25 石器 (10)



図版26 石器 (11)



図版27 石器・石製品・銃弾 (12)



財団法人 北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第50集

深川市 国見 2 遺跡

— 北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 —

昭和63年3月31日 発行

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒064 札幌市中央区南26条西11丁目
TEL (011) 561-3131

印刷 中西印刷株式会社
〒065 札幌市東区東雁来3条1丁目1番34号
TEL (011) 781-7501

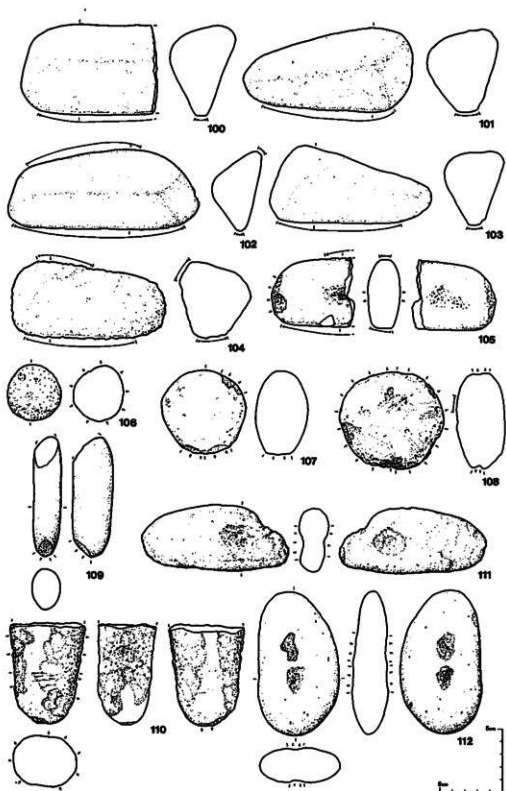
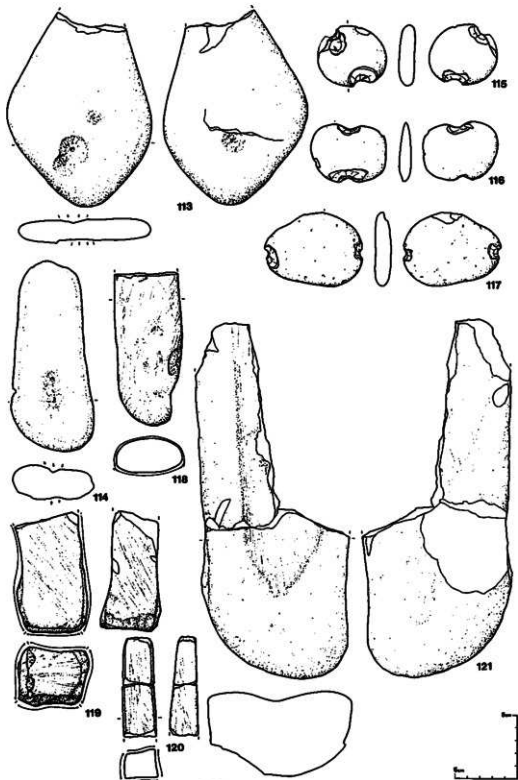


圖 II-13 石器 (7)



圖II-14 石器 (8)

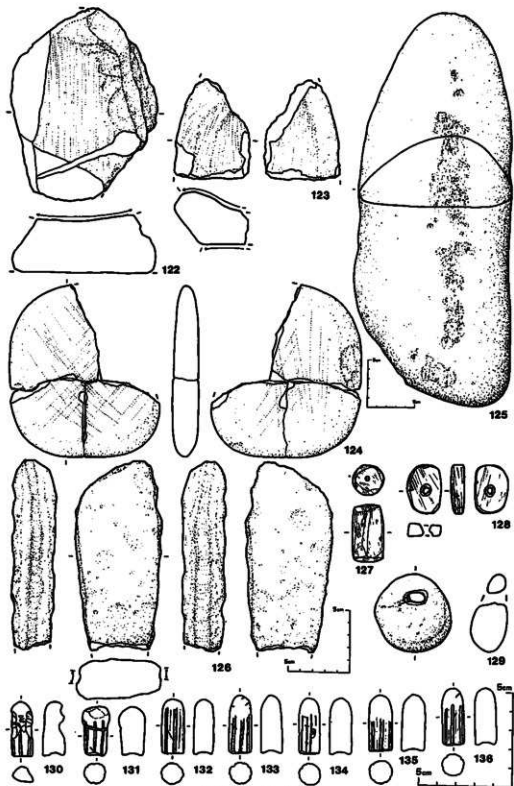
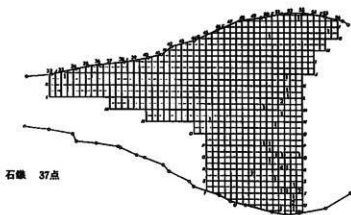
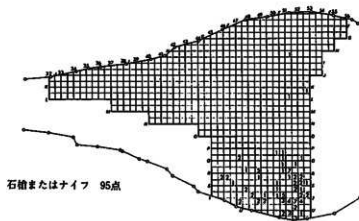
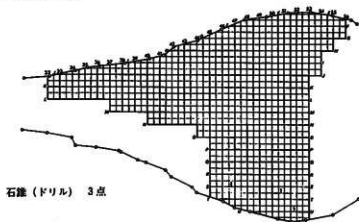


圖 II-15 石器 (9)

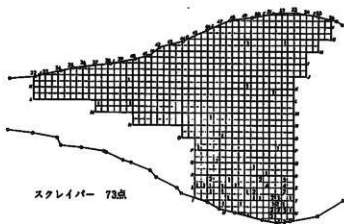


凡例

2 Grid別出土点数

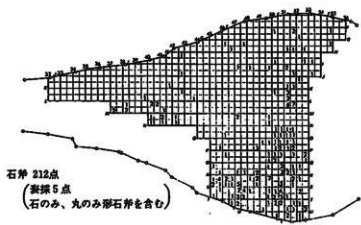
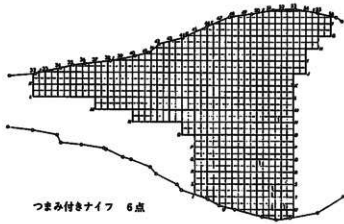


図Ⅱ-16 石器の分布(1)

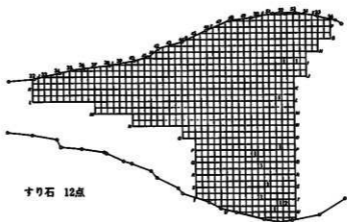


凡例

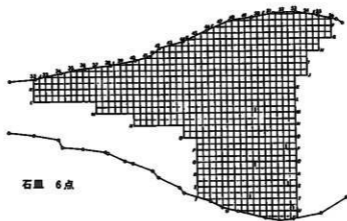
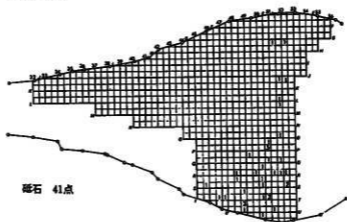
2 Grid別出土点数



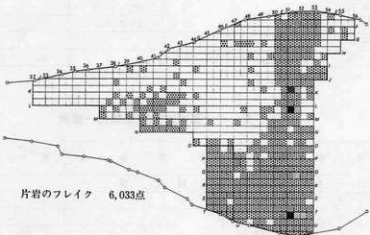
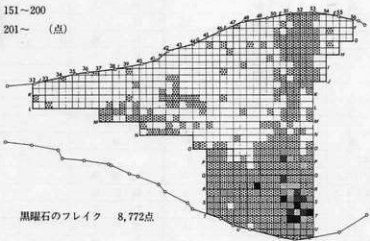
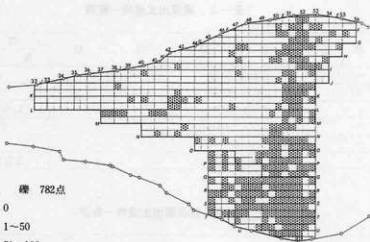
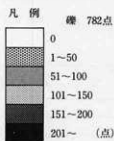
図II-17 石器の分布(2)



2 Grid別出土点数



図Ⅱ-18 石器の分布(3)



図Ⅱ-19 石器の分布(4)

表-2 遺構出土遺物一覧表

遺構名	名称	分類	数量	
			覆土	床面
P-1	土器	北筒式	6	
*	スクレイパー		1	
*	フレイク(Obs.)		1,566	
*	フレイク(Schi.)		37	
*	礫		1	
*	合計		1,611	

表-3 包含層出土遺物一覧表

名称	分類	数量	名称	分類	数量
土器	トコロ6類	470	石皿		6
*	トコロ5類	20	台石		2
*	余市式	33	石錘		3
*	縄文中期	55	Rフレイク		7
*	縄文後期	23	Uフレイク		107
*	不明(得手)	8	Obs.フレイク		8,772
*	不明	1,036	Schi.フレイク		6,033
	計	1,645	フレイク		285
石楯		37	礫		782
石槍またはナイフ		95	計		16,506
石錘(ドリル)		3	石製品		4
つまみ付きナイフ		6	鉄製品		32
スクレイパー		73	陶器		29
石核		19	ガラス		20
クサビ形石器		2	銃弾		19
石斧		212	炭化物		12
たたき石		5	硬貨		1
すり石		12	貝ボタン		1
くぼみ石		7	計		118
礫石		41	総計		18,269

表-4 遺構出土掲載遺物一覧表

番号	遺構	名称	分類	層位	重さ(g)	石材
1	P-1	土器	北筒式	覆土		
2	*	*	*	*		
3	*	*	*	*		
4	*	スクレイパー	*	*	4.2	Obs.

表-5 包含層出土掲載土器一覽表

番号	分類	発掘区	番号	分類	発掘区
1	トコロ6類	Q-50-d	13	トコロ5類	M-40-c
2	+	T-51-a	14	トコロ6類	T-52-a
3	+	R-50-c	15	+	N-52-b
4	+	Q-51-b	16	+	S-47-d
5	+	R-50-c	17	トコロ5類	Q-48-b
6	+	Q-50-b	18	余市式	Q-48-b
7	+	F-52-d	19	+	L-52-d
8	+	R-50-b	20	+	Q-47-c
9	+	Q-50-a	21	+	S-52-c
10	+	Q-50-c	22	+	R-50-c
11	縄文中期後半	R-50-c	23	縄文後期	S-51-c
12	+	Q-49-c	24	+	N-49-d

表-6 包含層出土掲載石器一覽表

番号	分類	発掘区	大きさ(mm)	重さ(g)	石材	番号	分類	発掘区	大きさ(mm)	重さ(g)	石材
1	石 鏃	Q-51-b	4.5 × 1.1 × 0.2	1.3	Obs.	25	石 槍	J-33-a	3.5 × 2.0 × 0.4	1.6	Obs.
2	+	S-52-c	3.4 × 1.2 × 0.3	1.1	Obs.	26	+	S-50-c	4.6 × 2.8 × 0.5	4.3	Obs.
3	+	Q-51-b	(2.7) × 1.1 × 0.3 (0.8)	0.8	Obs.	27	+	U-51-c	(4.7) × 2.3 × 1.1 (8.7)	0.8	Obs.
4	+	S-52-a	1.8 × 1.2 × 0.2	0.4	Obs.	28	+	Q-41-a	(5.3) × 2.4 × 0.9 (8.9)	0.8	Obs.
5	+	J-51-d	2.1 × 1.3 × 0.2	0.4	Obs.	29	+	Q-51-b	4.6 × 2.2 × 0.6	4.6	Obs.
6	+	N-50-d	(2.1) × 1.3 × 0.25 (0.8)	0.8	Obs.	30	+	Q-48-c	4.2 × 1.9 × 0.6	3.9	Obs.
7	+	Q-50-b	2.9 × 2.5 × 0.3	0.9	Obs.	31	+	U-49-	(4.8) × 3.0 × 0.6 (7.5)	0.8	Obs.
8	+	M-45-a	3.4 × (4.6) × 0.35 (1.8)	1.8	Obs.	32	+	P-50-d	6.5 × 2.0 × 0.85	10.7	Obs.
9	+	P-50-c	(2.8) × 1.4 × 0.3 (1.0)	1.0	Obs.	33	+	R-52-a	4.3 × 2.5 × 0.7	5.5	Obs.
10	+	R-48-d	2.9 × 2.3 × 0.7	3.3	Obs.	34	+	R-52-a	(3.6) × 2.6 × 0.4 (4.6)	0.8	Obs.
11	+	M-51-a	(2.4) × 1.5 × 0.3 (1.0)	1.0	Obs.	35	石 槌 ほろマイタ	S-49-b	6.4 × 2.2 × 0.6	6.4	Obs.
12	+	L-51-a	(1.8) × 1.5 × 0.25 (0.7)	0.7	Obs.	36	+	S-49-b	5.7 × 2.3 × 0.6	10.8	Obs.
13	+	F-50-b	3.9 × (1.2) × 0.3 (2.2)	2.2	Schl.	37	+	T-51-d	4.3 × 1.9 × 0.6	4.3	Obs.
14	+	E-52-d	(1.5) × 1.0 × 0.4 (0.5)	0.5	Obs.	38	+	R-51-a	4.2 × 2.3 × 0.7	6.8	Obs.
15	+	P-50-a	2.9 × 1.2 × 0.5	0.7	Obs.	39	+	P-47-b	4.8 × 1.6 × 0.7	5.5	Obs.
16	+	K-51-c	2.5 × 1.5 × 0.2	0.6	Obs.	40	+	P-50-c	4.0 × 1.7 × 0.5	2.4	Obs.
17	+	L-51-a	3.3 × 1.5 × 0.3	1.0	Obs.	41	+	S-50-b	3.8 × 1.9 × 0.6	3.4	Obs.
18	+	F-55-a	3.5 × 1.5 × 0.5	1.4	Obs.	42	+	O-40-	4.6 × 1.8 × 0.8	5.4	Obs.
19	+	Q-51-b	3.3 × 2.0 × 0.6	3.1	Obs.	43	+	Q-50-d	3.8 × 1.6 × 0.6	2.8	Obs.
20	+	Q-51-c	3.4 × 1.2 × 0.4	1.1	Obs.	44	+	R-50-c	3.4 × 1.5 × 0.7	2.7	Obs.
21	+	S-51-b	(2.2) × 0.9 × 0.3 (0.5)	0.5	Obs.	45	+	S-50-a	5.95 × 1.85 × 7.0	8.6	Obs.
22	+	P-52-c	(3.1) × 1.0 × 0.6 (1.4)	1.4	Obs.	46	+	Q-51-d	8.7 × 3.4 × 1.1	25.4	Obs.
23	+	R-50-b	4.9 × 1.8 × 0.7	4.0	Obs.	47	+	R-48-d	7.4 × 2.3 × 0.7	15.0	Schl.
24	石 槍	S-52-a	3.8 × 2.1 × 0.8	4.6	Obs.	48	石 鏃	S-50-d	3.95 × 5.0 × 2.15	2.7	Obs.

番号	分類	発掘区	大きさ(mm)	重さ(g)	石材	番号	分類	発掘区	大きさ(mm)	重さ	石材
49	石 鏝	R-46-c	4.8 × 2.5 × 0.8	7.7	Schl.	93	石片 未成品	T-52-a	(13.5) × (4.6) × 3.2	(281.8)	Schl.
50	つまみ付け ナイフ	T-51-b	5.6 × 2.3 × 0.7	8.0	Obs.	94	*	T-52-c	(13.2) × (5.0) × 2.5	(227.0)	Schl.
51	*	T-52-b	6.4 × 0.7 × 2.05	7.4	Obs.	95	*	R-45-d	25.4 × 5.9 × 3.2	988.8	Schl.
52	*	S-51-b	(5.1) × 0.7 × 1.95	(6.5)	Obs.	96	石 斧	L-51-a ¹⁾ e ²⁾	11.8 × 41.5 × 5.1	1360.0	Schl.
53	*	R-46-b	(3.1) × 2.6 × 0.6	(5.7)	Obs.	97	石のみ	R-45-b	(9.1) × 2.5 × 0.8	(21.5)	Schl.
54	*	Q-50-c	7.3 × 3.2 × 0.9	18.0	Obs.	98	丸のみ	S-47-c	9.7 × 2.2 × 1.2	43.4	Schl.
55	*	M-51-c	(3.1) × 3.8 × 0.8	(9.8)	Obs.	99	未成品	J-71-a	(5.7) × 2.5 × 1.1	(23.7)	Schl.
56	*	S-51-a	(3.6) × 1.7 × 0.7	(3.7)	Obs.	100	すりお (断面三角)	R-50-c	7.3 × (10.8) × 5.2	(596.0)	Gr.
57	スグレ イ バー	S-46-c	(4.3) × 3.3 × 0.7	(11.8)	Obs.	101	*	P-49-d	6.7 × 13.5 × 5.7	628.8	And.
58	*	Q-49-d	(4.1) × 3.8 × 1.1	(20.3)	Obs.	102	*	H-53-b	6.4 × 15.2 × 3.9	449.2	Gr.
59	*	R-47-d	2.9 × 2.6 × 0.7	5.7	Obs.	103	*	S-50-b	6.1 × 12.9 × 4.7	320.8	Gr.
60	*	K-51-a	(4.4) × 2.7 × 1.0	(9.9)	Obs.	104	*	Q-50-a	6.0 × 12.3 × 5.7	566.0	Gr.
61	*	J-39-d	(4.1) × 2.5 × 1.2	(10.7)	Obs.	105	すりお (すり面)	O-51-c	6.6 × (5.5) × 2.6	(143.7)	Gr.
62	*	G-52-a	3.4 × 1.3 × 0.7	3.0	Obs.	106	すり石 (円形)	F-51-b	4.4 × 4.3 × 3.9	87.8	And.
63	*	S-49-a	5.3 × 1.7 × 0.9	7.6	Obs.	107	すり石 (断面三角)	R-51-a	6.6 × 6.7 × 4.2	249.0	Ap.
64	*	R-46-c	4.8 × 2.0 × 1.0	8.9	Obs.	108	*	T-51-d	7.7 × 8.3 × 3.9	336.8	And.
65	*	S-52-a	5.2 × 1.8 × 1.0	12.4	Obs.	109	たたま石 (断面三角)	Q-50-d	9.5 × 2.2 × 3.3	98.0	Sa.
66	*	R-45-b	5.2 × 5.1 × 1.0	27.6	Obs.	110	*	R-52-	(8.1) × 6.0 × 4.1	(272.5)	Sa.
67	*	S-52-c	3.5 × 2.7 × 1.0	9.3	Obs.	111	くぼみ石 (断面三角)	O-50-c	4.7 × 11.7 × 2.4	175.2	Gr.
68	*	S-50-b	3.2 × 2.2 × 0.5	3.2	Obs.	112	*	N-51-c	11.5 × 6.5 × 2.8	283.0	And.
69	*	R-48-b	2.55 × 2.85 × 0.85	5.6	Obs.	113	くぼみ石 (断面三角)	R-48-a	15.4 × 11.6 × 1.8	462.0	Sa.
70	*	R-47-b	3.0 × 3.4 × 0.6	6.8	Obs.	114	くぼみ石 (断面三角)	O-41-	15.1 × 6.6 × 2.7	343.7	Sa.
71	*	U-51-c	2.5 × 2.2 × 0.5	3.2	Obs.	115	石 鏝	K-51-d	5.1 × 5.3 × 1.4	49.3	Sa.
72	*	M-46-a	(2.4) × 2.5 × 0.7	(4.0)	Obs.	116	*	J-52-d	4.6 × 6.0 × 1.0	41.8	Tu.
73	*	N-47-b	4.4 × 4.2 × 1.6	11.2	Obs.	117	*	P-50-a	5.9 × 7.8 × 1.3	71.2	And.
74	*	R-52-b	(4.6) × 3.7 × 0.7	(15.8)	Obs.	118	砥 石	R-50-a	(12.1) × 5.4 × 2.7	(251.7)	Sa.
75	*	S-46-a	3.3 × 2.1 × 0.6	3.7	Obs.	119	*	R-42-a	9.6 × 5.6 × 4.8	324.8	Sa.
76	*	S-49-c	2.45 × 2.45 × 1.05	5.7	Obs.	120	*	J-51-d	8.0 × 2.6 × 2.2	62.0	Sa.
77	石 槌	T-50-d	2.2 × 2.3 × 1.5	8.8	Obs.	121	石 皿	R-52-b	(28.3) × (12.1) × 6.8	(200.0)	Sa.
78	*	R-50-d	2.9 × 2.4 × 1.4	8.4	Obs.	122	*	R-52-b	(15.5) × (11.9) × 4.7	(192.0)	Sa.
79	*	T-47-d	4.0 × 2.3 × 0.8	11.4	Obs.	123	*	Q-49-b	(8.0) × (6.0) × 4.2	(219.0)	Sa.
80	タケノ 石 鏝	Q-51-b	2.3 × 1.6 × 0.9	3.6	Obs.	124	*	三三三三	(13.8) × 12.1 × 2.1	(376.9)	Sa.
81	石 斧	Q-41-a	16.4 × (4.9) × 2.0	(253.8)	Schl.	125	台 石	R-50-	41.6 × 16.8 × 7.4	7400.0	And.
82	*	Q-50-c	13.4 × 4.1 × 1.3	131.5	Schl.	126	石製品	J-50-c	(10.1) × 4.7 × 2.3	(153.9)	And.
83	*	Q-51-b	(10.5) × (3.2) × 1.25	(72.3)	Schl.	127	*	O-48-d	3.0 × 1.6 × 1.6	13.7	Stlic.
84	*	P-40-a	(6.1) × 5.0 × 1.2	(65.6)	Schl.	128	*	Q-48-b	2.6 × 1.8 × 0.7	6.3	Schl.
85	*	H-50-	(4.2) × 3.8 × 1.2	(28.4)	Schl.	129	*	H-52-c	4.2 × 4.1 × 1.9	33.4	Tu.
86	*	Q-50-c	12.7 × 4.4 × 1.4	153.4	Schl.	130	銃 弾	G-57-a	2.9 × 1.1 × 0.9	23.8	鉛
87	*	S-47-d	10.2 × 3.8 × 1.1	65.0	Schl.	131	*	G-50-c	2.7 × 1.5 × 1.1	28.8	*
88	石片 未成品	R-45-d	24.5 × 7.3 × 4.2	1011.0	?	132	*	F-55-a	2.9 × 1.2 × 1.1	29.0	*
89	*	L-51-d	17.3 × 4.1 × 1.7	172.7	Schl.	133	*	K-50-d	3.1 × 1.2 × 1.1	30.2	*
90	*	T-52-c	(13.3) × 4.8 × 2.0	(261.1)	Schl.	134	*	N-49-d	3.0 × 1.1 × 1.2	29.8	*
91	*	R-45-b	16.8 × 5.7 × 2.6	369.8	Schl.	135	*	L-52-c	3.0 × 1.2 × 1.2	29.6	*
92	*	S-50-c	(12.4) × 4.6 × 2.4	(224.8)	Schl.	136	*	P-50-b	3.0 × 1.2 × 1.2	29.7	*

Ⅲ まとめ

2箇年の調査によって土壌1基、フリイクの集中出土地点7箇所が検出された。出土した遺物は縄文時代の土器片・石器・フリイク・礫や明治中頃以降のものと思われる銃弾・陶器・鉄器など計約20,000点である。調査は、昭和63年度も継続される予定になっているが、これまでの調査の成果から本遺跡の性格及び遺物について検討し、まとめとする。

1 遺跡の時期と性格について

本遺跡から出土した土器は、縄文時代早期のものと同期後半から後期初頭と思われるものである。石器は時期を知ることが困難なものが多いが、中には早期の細身の三角形石鏃・断面三角形のすり石、前期の三角形石鏃、中期後半から後期初頭の有茎石鏃・石槍またはナイフ・断面矩形の砥石など、その特徴的な形態から時期が想定されるものもある。土器と石器の属すると思われる時期を総合して考えると、国見2遺跡は縄文時代早期・前期・中期・後期に関わる遺跡と思われる。そして、その主体となる時期は、出土した遺物のうち多くを占める縄文時代中期後半から後期初頭と推定される。

今回の調査では検出された土壌がわずかに1基と少なく、また、包含層のほとんどが耕作による擾乱を受けていたことから遺跡の性格を詳しく捉えることが困難ではあるが、遺物の出土状況・遺物内容から本遺跡の性格を知るための特徴を挙げると次のようになる。

- (1) 黒曜石や片岩のフリイクが遺物総数に占める割合が多い。
- (2) 黒曜石や片岩のフリイクが集中して出土した地点が7箇所認められた。
- (3) 集中して出土した片岩のフリイクの中には石斧未成品と剝片とが接合し、素材の大きさ、剝離過程の判る接合資料がある。
- (4) 片岩を素材として用いた石斧・石斧未成品が多量に出土している。
- (5) 石斧の未成品の中には、製作工程の各段階のものが認められる。
- (6) 石斧の素材として用いられる片岩の自然礫が出土している。
- (7) 石器製作に用いられたと思われる、たき石・砥石・台石等の石器が出土している。

これらの特徴から国見2遺跡の性格のひとつとして石器の製作が行われた場所であることが想定される。とくに石斧・石斧未成品や、これらと同じ石材のフリイクが多量に出土していることから「石斧製作の場」としての性格が考えられる。耕作によって削平された可能性もあるが、18,900㎡にも及ぶ調査で住居跡が検出されなかったことは、「生活の場」と言うよりはむしろ「石器製作の場」としての性格が強かったものと思われる。したがって、これらの遺物を残した人々の集落を営んだ場所は未調査区あるいは本遺跡の周辺に想定される。

本遺跡と同様に石器が製作されたと考えられている遺跡には、旭川市の嵐山2遺跡、深川市の向陽2遺跡などがある。これらの遺跡は遺構が少なく、多量の片岩・黒曜石のフリイクを出土していること。数箇所の片岩フリイクの集中地点が認められたこと。また、石斧には片岩を

石材とするものが多いこと。遺跡が石狩川に近い丘陵上にあることなどが共通している。これらの片岩は、神居古潭変成岩地帯にあり、石狩川の河原石にも多くみられる。

2 空知地方出土の余市式土器について

余市式土器は、道央から道南にかけて分布しているが、その北限は、桑原護氏の論文に示された地図によれば、第一期（伊達山期）には浜益郡浜益村、第二期（静狩上層・入江三類の時期）には空知郡奈井江町付近にあるとされている（桑原 1968）。また、石狩郡当別町伊達山遺跡第Ⅰ地点の報告書には、桑原氏の図に一部加筆したものが掲載されており、「より古いグループ」（円形刺突文をもつもの）は深川市付近、「より新しいグループ」（円形刺突文をもたないもの）は小樽市付近が北限で（註1）、「宗谷とエリモを結ぶ山地の東側へまでは至っていない」とある（岩崎・三重・壺田 1970）。

最近、開発に伴う緊急調査が増加する中で、空知地方における余市式土器の資料も多くなってきたが、概内山地よりも北東から出土した例は報告されておらず、現在までのところ、分布の北限は、国見2遺跡が位置する深川市にあるようである。

ここでは、空知地方から出土した余市式土器の分類を行い、地域的な特徴をとらえてみたいと思う。ただし、細分されたものの間の新旧関係は、資料の不足のために明確ではない。

空知地方出土の余市式土器は、遺構に伴った例に乏しく（註2）、多くは断片的な資料である。文様などから、次のように分類することができる（図Ⅲ-1・2）。

1類 口縁部に円形刺突文が施されたもの（1～6）

砂川市西豊沼A遺跡（1、野村編 1977・北海道埋蔵文化財センター編 1987b）、空知郡栗沢町由良A遺跡（2、富水 1987）、深川市向陽2遺跡（3、北海道埋蔵文化財センター編 1987c）、夕張郡栗山町鳩山第Ⅰ遺跡（4・5、栗山町社会科サークル編 1964）、空知郡奈井江町茶志内4遺跡（6、北海道埋蔵文化財センター編 1986b）から出土している。1はほぼ直立する器形で、口縁部の粘土帯上には押引文がめぐっている（註2）。2の円形刺突文は、斜め下から突かれたものである。1・2の口唇部には縄文が施されている。3は粘土帯を張り付けた後に刺突がなされているようである。4・5は二段にわたって口縁部が折り返されたもので、4は幅の広い折り返し帯の直下にも円形刺突文がある。

2類 円形刺突文をもたないもの（7～9、12～17）

a 幅の広い折り返し帯をもつもの（7～9）

砂川市空知太2遺跡（7・9、北海道埋蔵文化財センター編 1987b）、同市空知太遺跡（8、野村編 1977・北海道埋蔵文化財センター編 1987b）などから出土している。7・9は口縁部が二段にわたって折り返されている。7は上部の細い折り返し帯上に半截竹管状工具による押引文がある。8は直線的に立ち上がる器形である。

b 幅の狭い折り返し帯あるいは貼付帯をもつもの（12～17）

深川市国見2遺跡（12・13）、空知郡奈井江町宮村2遺跡（14・17、北海道埋蔵文化財センター編 1986b）、空知太2遺跡（15・16、北海道埋蔵文化財センター編 1987b）など

から出土している。15～17は2つの異なる原体による羽状縄文が施されている。17は斜めに下がる貼付帯が一部にみられる。

3類 縄線文の施されたもの (18～20)

空知太2遺跡 (18・19、(財)北海道埋蔵文化財センター編 1987b)、由良A遺跡 (20、富水 1987) から出土している。18・19の縄線文は折り返し帯の上に施されている。20は粗い斜行縄文を地文として、口縁に平行な2本の縄線文が押捺され、更に縦方向に2本の縄線文が加えられたものである。

4類 縄文のみのもの (21～24)

由良A遺跡 (21～23、富水 1987)・国見2遺跡 (24) などから出土している。21～23は粗い縄文が施されたもので、23には、繊維の混入がみとめられるという。

1類・2類aに類似したものは、江別市大麻1遺跡 ((財)北海道埋蔵文化財センター編 1980・1981)・同市西野幌3遺跡 ((財)北海道埋蔵文化財センター編 1980・1987a)、石狩郡当別町伊達山遺跡第I地点 (岩崎・三室・室田 1970)、浜益郡浜益村浜益中学校遺跡 (大場・石川 1961) などであり、従来、伊達山式 (高橋 1981) とされてきたものにほぼ相当すると思われる。ただし、空知地方のものには、大麻1遺跡や伊達山遺跡第I地点の資料にみられるような、口縁部に無文帯をもつ例はないようである。また、伊達山遺跡第I地点で出土しているような「後期的な沈線文のある土器」(大沼 1981)も報告されていない。

2類bは従来、1類・2類aに伴うとみなされてきたが、後者とは地の縄文にもわずかに違いがあり、将来、細分される可能性もあるといえよう。

3類のうち、18・19に類似したものは虻田郡虻田町高砂貝塚 (大島・百々編 1987) など噴火湾沿岸に分布し、大麻1遺跡 ((財)北海道埋蔵文化財センター編 1981)からもわずかに出土している。また、20に類似したものは、苫小牧市タブコブ遺跡 (佐藤・宮夫編 1984)、登別市川上B遺跡 ((財)北海道埋蔵文化財センター編 1986a) など胆振・日高地方を中心に報告されている。タブコブ遺跡では、これらに「貼付帯の有無にかかわらず縄端を円形刺突文風に押圧したグループ」や縄文のみのグループが伴っており、宮夫婦氏によって「タブコブ式」が設定されている。「タブコブ式」は伊達山式に対比されるという (佐藤・宮夫編 1984) (註4)。

4類のうち、21～23は20に伴うものと思われる。

以上、空知地方の余市式土器について簡単に述べてきたが、余市式の前後、この地方には、どのような土器が存在したのだろうか。

空知地方では、トコロ6類に相当するものが各地にみられるが、トコロ5類に相当するものは、国見2遺跡からわずかに出土している程度であり、それらに後続するものは報告されていない。

一方、夕張郡由仁町東三川遺跡からは船舶上層式 (山代・野村 1969)、夕張郡長沼町ウレロッチ川左岸遺跡 (野村編 1977) や深川市音江の環状列石 (駒井 1959) からは、手箱式土

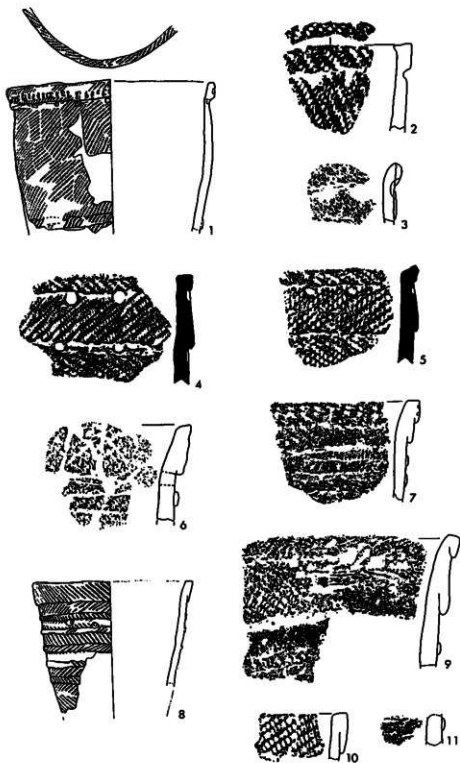
器が出土しているが、余市式土器との間には若干の断絶があるといえる。

当地方における余市式土器の細分・終末の問題は、トコロ5類以降の分布の縮小や、入江式土器の北上(註5)ともからめて今後の課題であろう。

- 註1 余市式土器の新しいものに関して認められる差異は、円形刺突文をもたない土器がどのような土器と共存するのかについての両者の考え方のちがいを反映しているものと思われる。
- 2 砂川市空知太2遺跡では、H-2の床面から9・10が「北筒式土器」の破片一点とともに検出されている(跡北海道埋蔵文化財センター編 1987b)。また、深川市向陽遺跡でも住居跡から出土したとされる(深川市 1977)。
- 3 空知太2遺跡の報告者は、「北筒式土器と余市式土器の特徴をかねそなえ」たものと述べている(跡北海道埋蔵文化財センター編 1987b)。
- 4 大沼氏は「タブコブ式」を余市式の新しい段階のものと考えている(大沼 1981)。
- 5 入江式土器は、江別市大麻1遺跡(跡北海道埋蔵文化財センター編 1981)などから出土している。

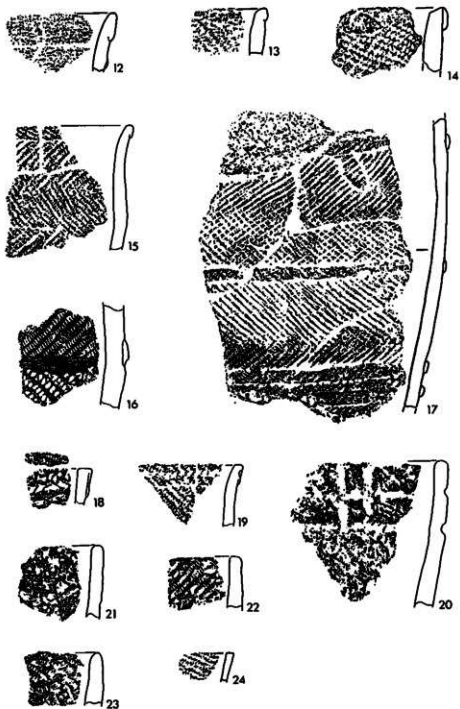
引用文献

- 岩崎隆人・三室俊昭・室田彰剛 1970 『伊達山遺跡』、当別町教育委員会
- 大島直行・百々幸雄編 1987 『高砂貝塚』、札幌医科大学解剖学第2講座
- 大沼忠春 1981 「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」(『考古学雑誌』第66巻第4号、日本考古学会)
- 大場利夫・石川徹 1961 『浜益遺跡』、浜益村役場・浜益村教育委員会・浜益村文化財調査委員会
- 栗山町社会科サークル編 1964 『栗山町の文化財』、栗山町教育委員会
- 森原 康 1968 『余市式土器』(『考古学雑誌』第54巻第1号、日本考古学会)
- 駒井和愛 1959 『香江』、慶友社
- 佐藤一夫・宮夫靖夫編 1964 『タブコブ』、苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財センター
- 高橋正勝 1981 『北海道南部の土器』(加藤晋平・小林達雄・藤本強編『縄文文化の研究』第4巻 縄文土器Ⅱ、雄山閣出版)
- 高木慶一 1987 『栗沢町由良A遺跡出土の遺物』(『北海道考古学』第23輯、北海道考古学会)
- 野村崇編 1977 『石狩川中流域の先史遺跡』(『空知文化財シリーズ』第6集、空知地方史研究協議会)
- 深川市 1977 『深川市史』
跡北海道埋蔵文化財センター編
- 1980 『大麻1遺跡・西野幌1遺跡・西野幌3遺跡・東野幌1遺跡』
- 1981 『大麻1遺跡』
- 1986a 『登別市 川上B遺跡 C地区』
- 1986b 『砂川市 焼山2遺跡 奈井江町 宮村2遺跡・茶志内4遺跡』
- 1987a 『江別市 西野幌3遺跡』
- 1987b 『砂川市 空知太2遺跡』
- 1987c 『深川市 向陽2遺跡』
- 山代照・野村崇編 1967 『北海道由仁町の先史遺跡』、由仁町教育委員会



図三-1 空知地方出土の余市式土器(1)

- 1 西豊宿A遺跡 2 由良A遺跡 3 向陽2遺跡 4・5 鳩山第Ⅰ遺跡
6 茶志内4遺跡 7・9～11 空知太2遺跡 8 空知太遺跡



図III-2 空知地方出土の余市式土器(2)

12・13・24 国見2遺跡 14 17 富村2遺跡 15・16・18・19 空知太2遺跡
20-23 由良A遺跡

2 国見2遺跡における石斧の製作過程の復原について

本文中で述べたように本遺跡出土の遺物のうち、特徴的なものとして、石斧と石斧の未成品や石斧の原石と思われる礫がある。これらは加工の状態で大まかに4種に分けられる。これは石斧の製作段階に対応するものと考えられる。

第1段階 (図版20)

石斧の原石と思われる自然礫や、その周辺にわずかに剝離がくわえられているものがある。15~20cm前後の一端が尖った寛状で扁平のものが出土している。出土量は少ない。

第2段階 (図Ⅱ-10・11-88~96・99 図版19)

荒削整形の段階。ほぼ全面に粗い剝離による整形が施されたもので、形態や整形のための剝離の施し方にバリエーションが認められる。大きさは30cm前後のものと20cm前後のものがある。形態には、断面が楕円形のもの、薄く扁平なものがある。剝離の施し方には、素材の形を大きく変えることなく刃部だけを作成しているもの、部分的に剝離が施され原石面を残したもの、全面に施されているものがある (図Ⅲ-4)。

図Ⅱ-12-96は素材の大きさと剝離過程がよく判る資料である。素材には一端の尖った礫を用いている。側面の中央から最初の剝離を加え、両端に向かって粗く大きい剝離を施している。同じ方法で、ほぼ全面の原石面を取り除いた後、更に小さな剝離を側面から加え、一端のやや尖った反り身の短冊状のものを作出している。断面は楕円形である (図Ⅲ-3)。この未成品は3つに折れて、多量のフレイクと共にまとまって出土した。この出土状況からみると整形剝離の途中に折れ、その場に捨てられたものと思われる。出土した破損品のほとんどは、この段階のものである。第2段階では多量の破損が出たと思われる。

第3段階 (図版21の上段)

調整のためのベッキングが施されたもので、断面が厚く亜円形のものが多い。破損品のみで全体の形態が判るものはない。出土量は少ない。

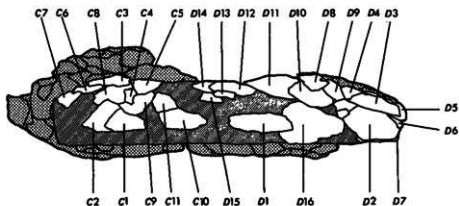
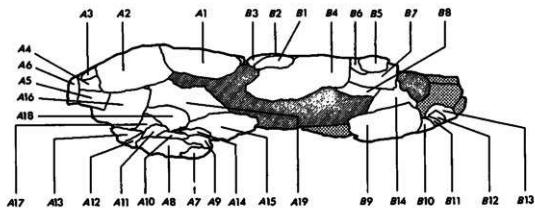
第4段階 (図Ⅱ-10-81~87 図版18・21の中段と下段)

磨きが全面ないし刃部に施されたもの。完成品あるいはそれに近いものと思われる。大きさは12cm前後のものが多く、形態は短冊状で薄いものがほとんどである。出土した完成品は、未成品に比べて少ないように思われる。

以上、各段階の特徴を述べた。第1段階の資料をみる限りでは、原石の採取に当たっては一端が尖った寛状の扁平のものを選択する傾向がある。第2・第3段階にみられた大形の未成品を作出できるような大きな原石は出土していない。本遺跡の包含層・地山に石斧の素材として多く用いられた片岩の礫が含まれないことを考えると、原石は他の場所から持ち込まれたものと思われる。

前述したとおり、本遺跡は石狩川に近く、その河原には上流の神居古潭変成岩地帯からもたらされた片岩の河原石が多い。このことから石狩川の河原が石斧の原石の採取地として考えることが出来る。

第2・第3段階はベッキングがあるフレイクが認められることから繰り返行われたと思われる。第4段階の完成品には、第3段階のベッキングを施さず磨きを加えられているものもある。ほとんどは小型で薄い短冊状のものである。第2・第3段階の未成品に見られた大形のものや断面の両端が尖る楕円形のもの・亜円のものに似た形態の完成品はない。



凡例

□ 剥離されたフレイク

■ 裏面のフレイク

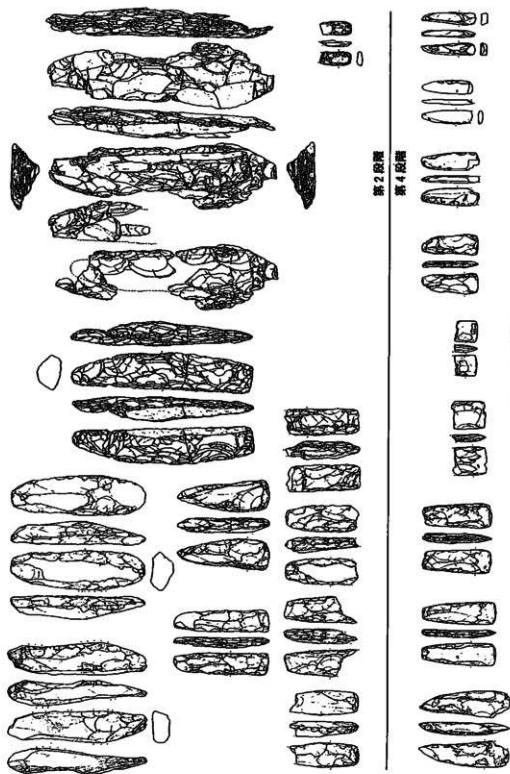
■ 石斧未成品の本体

A~Dは、一連の剥離工程群

C? → 一連の剥離工程群

 ↙ 数字は剥離の順序

図Ⅲ-3 石斧未成品の剥離工程復原図



図三—4 石斧の製作段階図

写 真 图 版



図版1 遺跡の遠景



図版2 発掘調査前の状況



図版3 調査の状況



図版4 調査の状況



図版5 調査の状況



図版6 調査の状況



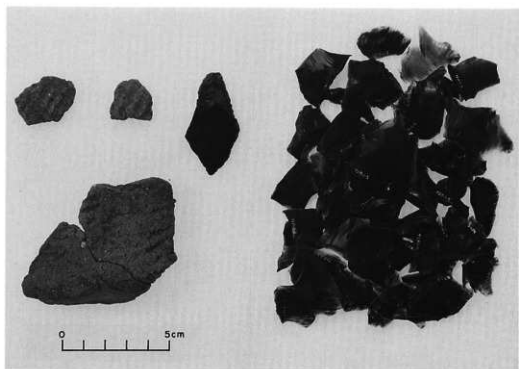
図版 7 発掘調査後の状況（昭和61年度）



図版 8 発掘調査後の状況（昭和62年度）



図版9 P-1



図版10 P-1 出土の遺物



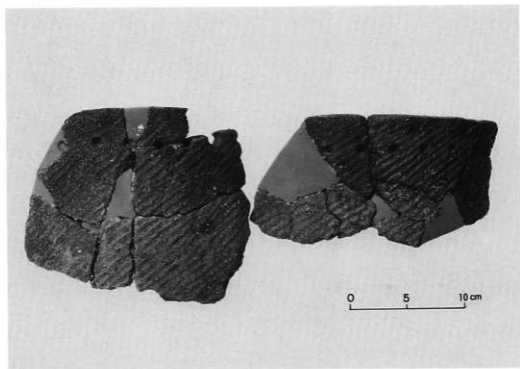
図版11 土器 (1)



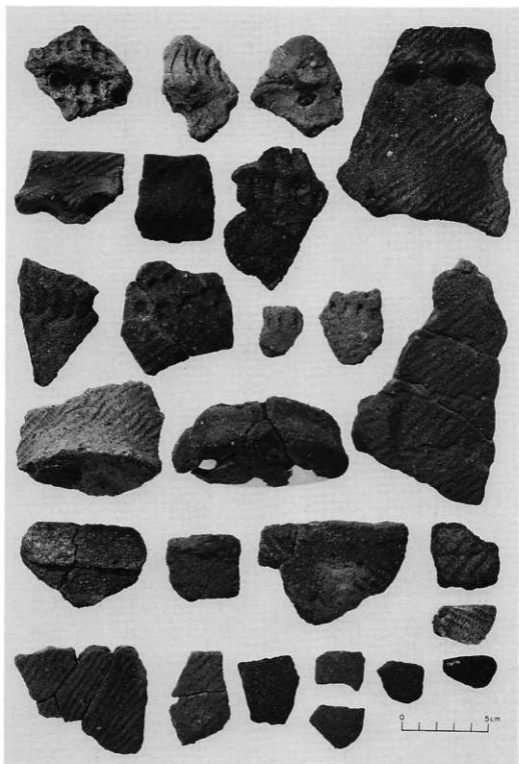
図版12 土器(1)の出土状況



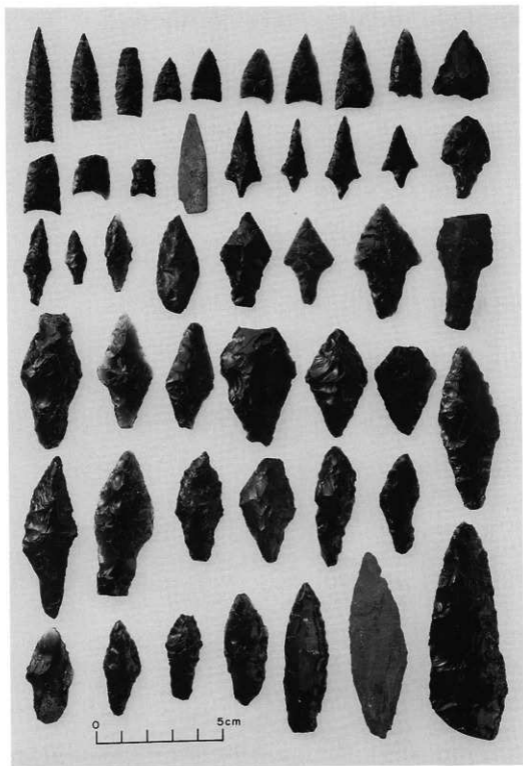
図版13 土器 (2)



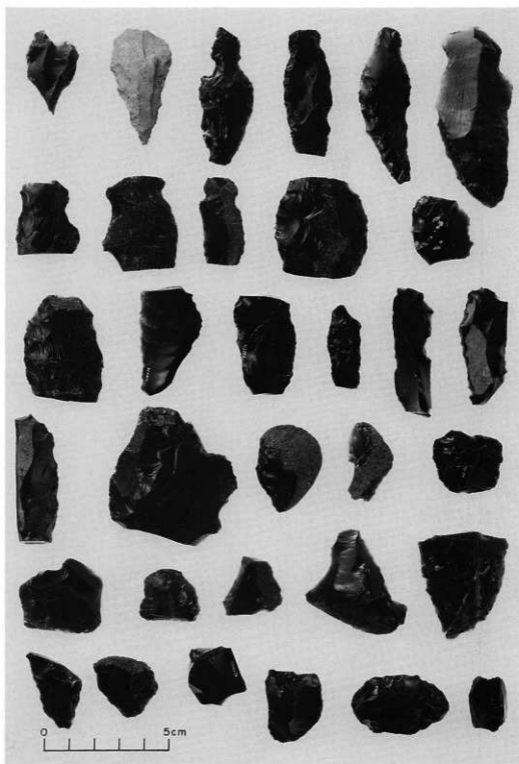
図版14 土器 (3)



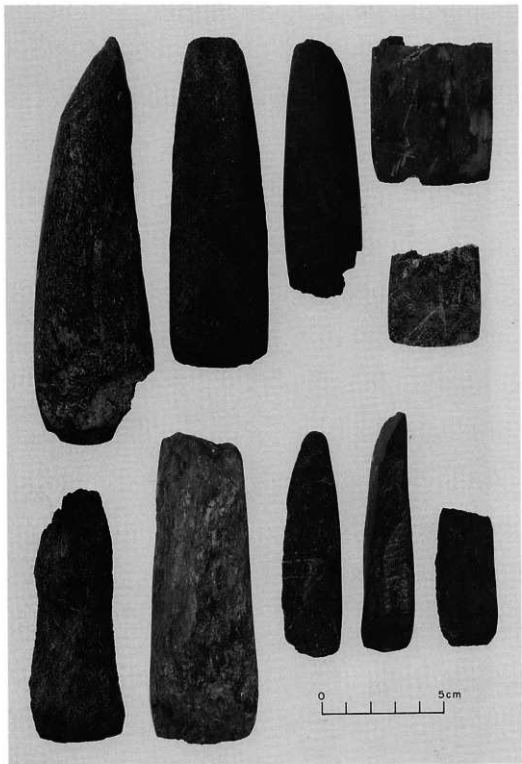
图版15 土器(4)



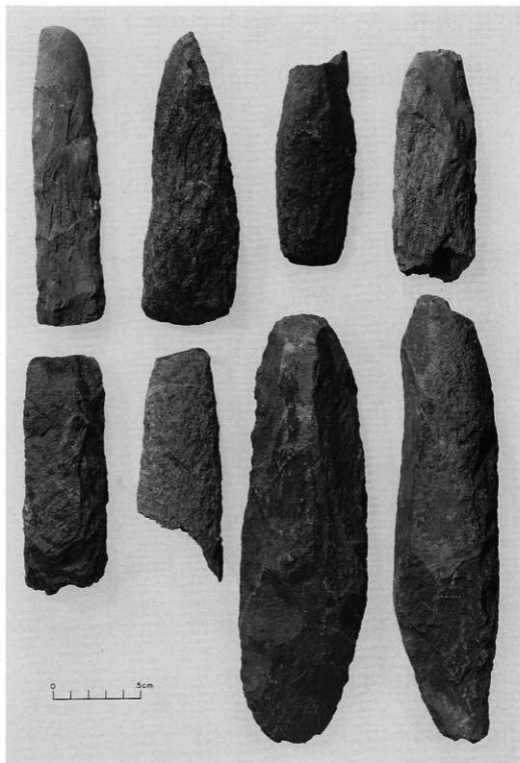
图版16 石器 (1)



图版17 石器(2)



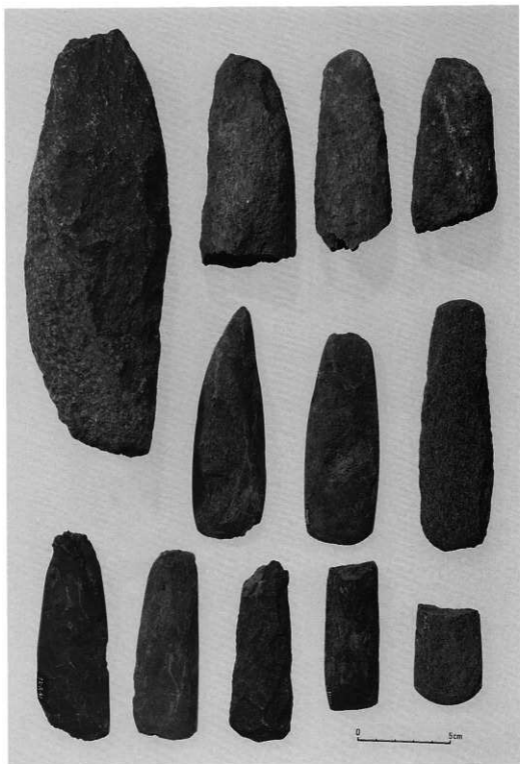
图版18 石器 (3)



图版19 石器(4)



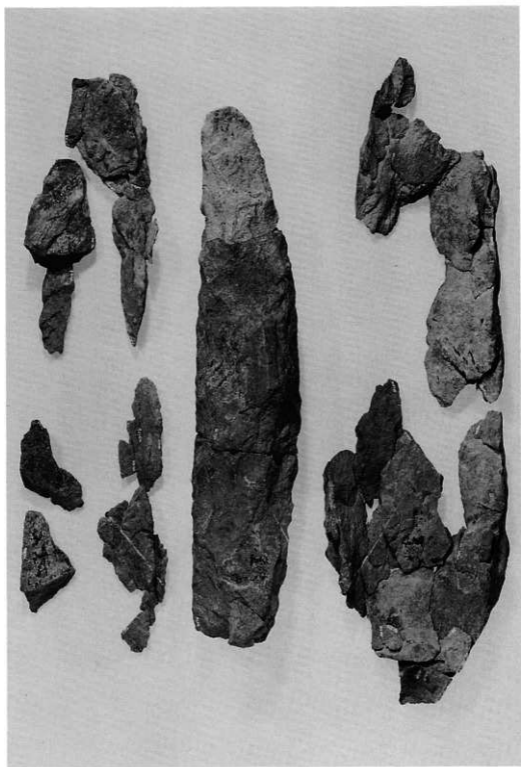
図版20 石器(石斧の原材と思われる礫：第1段階) (5)



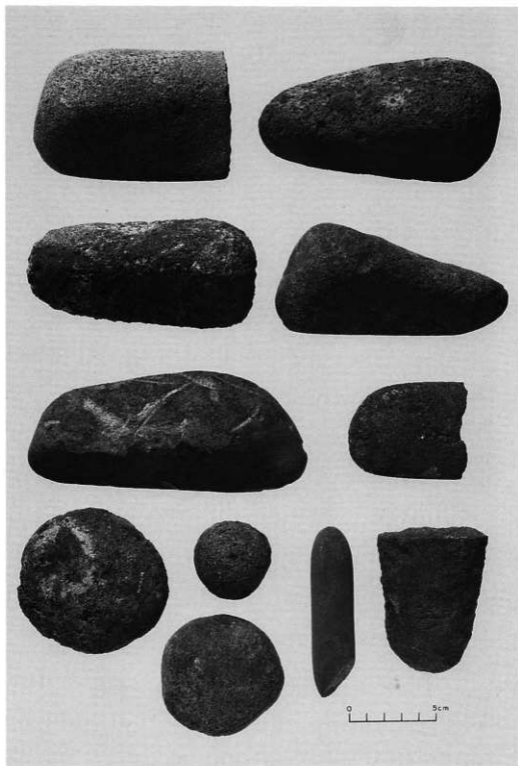
図版21 石器 (上段は第3段階、中・下段は第4段階) (6)



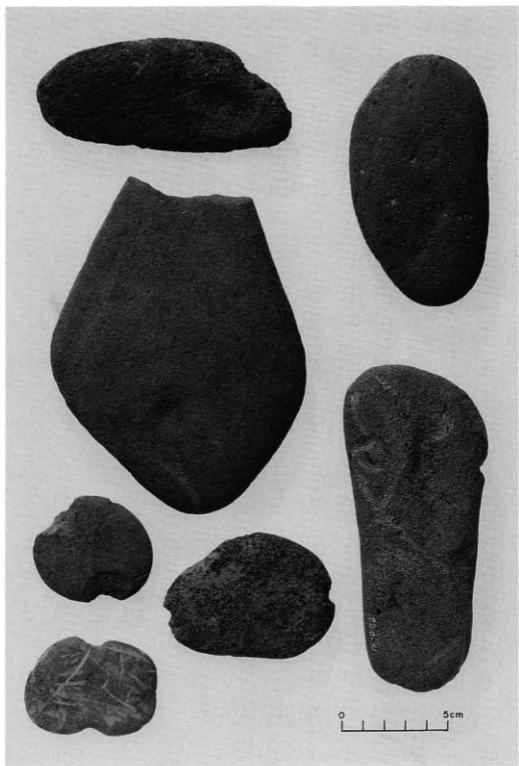
图版22 石器 (7)



圖版23 石器(8)



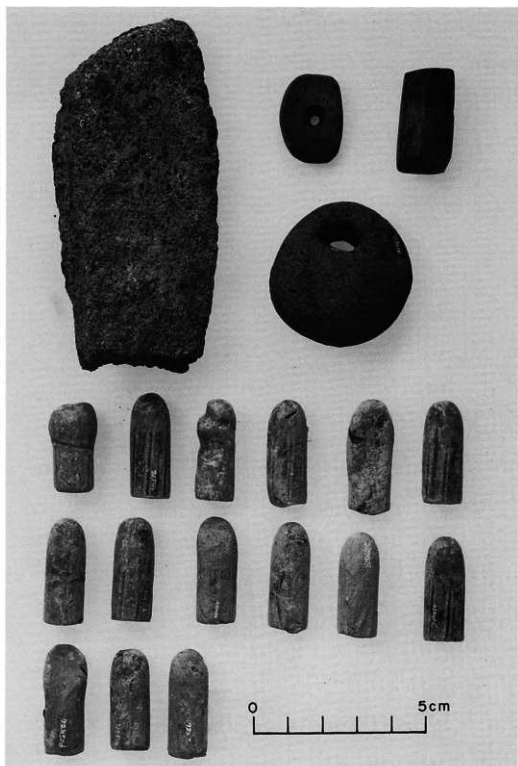
图版24 石器 (9)



圖版25 石器 (10)



図版26 石器 (11)



図版27 石器・石製品・銃弾 (12)



財団法人 北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第50集

深川市 国見2遺跡

— 北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 —

昭和63年3月31日 発行

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒064 札幌市中央区南26条西11丁目
TEL (011) 561-3131

印刷 中西印刷株式会社
〒065 札幌市東区東雁来3条1丁目1番34号
TEL (011) 781-7501
